

第14回「文芸思潮」エッセイ賞 発表

第14回
文芸思潮
エッセイ賞

二〇一九年度第14回「文芸思潮」エッセイ賞は、再開二年目で前回二六七篇を大幅に凌ぐ三四五篇という多数の応募をいただきました。心から御礼申し上げます。今回も十七歳から九十七歳まで幅広い世代から寄せられ、地域的にもアメリカや、ヨーロッパ、中国など世界各地からも御応募をいただいた、広がりのあるコンテストとなりました。貴重な体験だけでなく、歴史としても重要な記録や、社会に対する鋭い批評も多く寄せられ、現代に生きる人々の様々な姿が反映された豊かな内容でした。

例年の通り、まず選考委員会予選担当による第三次までの予選選考が行なわれ、最後に三神弘、水木亮、都築隆広、五十嵐勉四人の選考委員によって激しく、厳しく討議されました。厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

今号には当選作および優秀賞を発表させていただきますが、以後奨励賞なども、極力「文芸思潮」誌上に掲載させていただきます。御期待ください。

また明年も同じ要領で募集いたします。どうぞ奮って力作エッセイを御応募ください。お待ちしております。

「文芸思潮」エッセイ賞

最優秀賞

「トドを殺すことは
自分達を殺すこと」

福島由華里

(北海道札幌市)

優秀賞

「継ぎゆくひと」

中村郁恵 (北海道札幌市)

「枕飯」

高橋恵里花 (神奈川県川崎市)

「港の時代」

人間六度 (東京都練馬区)

「少年」

飯島もとめ (長野県長野市)

「暗闇を走る足音」

喜多木常雄 (北海道函館市)

「ピアノ」

武中 彩 (福岡県北九州市)

社会批評優秀賞

「少女は何をしていたか」

山家衛良 (長野県上田市)

「癌紀元後の世界」

松岡久仁子 (東京都杉並区)

「天恵戒驕」

荒田正信 (岩手県宮古市)

奨励賞

「郵便馬車の鈴は鳴り響いて」

菱川町子 (愛知県稲沢市)

「養老院」

近藤幹夫 (福井県勝山市)

「私の愛したお医者さん」

上坂明美 (北海道函館市)

「介助、赤ちゃん、神と死者」 茂木秀之 (奈良県生駒市)

「医原病と自死」 幸田芳樹 (大阪府東大阪市)

「徒歩十五分、美を探す旅」 八ノ瀬葉子 (大阪府吹田市)

「私の場合」 文月 嵐 (富山県氷見市)

「母の富士山」 村松佐保 (群馬県吾妻郡)

「食む喜び」 豊田崇久 (東京都世田谷区)

「老いの偏屈」 高橋惟文 (山形県山形市)

「『ううん、いいねえ』の意味するもの」

林 須磨 (京都府城陽市)

「貧乏性」 三上悦子 (神奈川県横須賀市)

「人形への恩返し」 押川志保 (福岡県福岡市)

「証」 東野洸惺 (奈良県橿原市)

「台場」 瀧沢 鈴 (北海道函館市)

「真夜中の並走」 灘上文彦 (神奈川県鎌倉市)

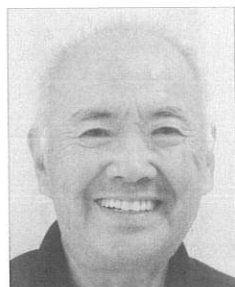
「私のヒロシマ」 山崎人功 (長野県安曇野市)

「忘れえぬ「イエスタデイ」」 田中美晴 (大阪府豊中市)

「また、延岡へ」 永野さくら (千葉県大網白里市)

「知り合い以上ともだち未満」 深雪朔 (北海道札幌市)

選評



みずき りょう

作家・劇作家・演出家
1942 北朝鮮生まれ
99 小説「祝祭」で
第16回織田作之助
賞受賞
2006 小説「お見合いツ
アー」で第49回農
民文学賞受賞
戯曲も多数ある

熟達したシニアのエッセイの味

水木亮

エッセイの審査は今回で一四回になる。思うに、こうい
うエッセイコンクールが日本中であつてよいと考える。理
由は高齢化社会にあつて、シニアが自分の人生を振り返り、
その体験を記録する機会が増えたこと。そして、身体的、
精神的な健康のためにも脳を活性化する執筆はよいことだ
ある。そして何より自分の体験を伝えたいシニアが、日本
中に多く存在することだ。

巷の^{ちまた}エッセイコンクールは、数百、数千の応募の中から
優秀な数編の作品を選び出すことが目的だが、文芸思潮の

魚の食料が投げ込まれていたという。父親はこのことを
「国を恨んでも人を恨むな。差別はするな」と他界するま
で言ったという。よい話だと思ふ。

現在日韓が政治的には激しく対立しているが、それは上
の方でのことであり、日本と韓国の人々は、お互いに人間
として心を通じ合う世界に生きていきたい。作者のこのよう
な経験を、後から来る者に伝えることもシニアの大切な仕
事だと思ふ。

優秀賞の荒田正信さんの「天恵戒驕」は、これも環境問
題に触れていて貴重である。

優秀賞の高橋恵里花さんの「枕飯」はタイトルがよい。
亡くなる祖母との関わりをよく書いている。

奨励賞の灘上文彦さんの「真夜中の併走」は妻が出産の
ため、病院に向かう途中暴走族の暴走に巻き込まれた。危
険ななかでどうしたらよいか窮地におちいる。ところが前
を走る暴走族の少女が、妊婦が車にいることを知り、仲間
に合図して、彼らがその場を立ち去ったエピソードである。
普通なら何をするかわからない暴走族が、少女の計らいで
去るところがよい話だ。少女もおそらくいろいろな悩みや
過去があり、もしかするとかつて墮胎の経験などあったか
もしれない、とも想像される。

奨励賞の東野悦悟さんの「証」は友人のKから聞いた話
である。エピソードがよい。認知症でKの母親は施設に

それは、入選や佳作の作品も多く、活字にされる機会がた
くさんあるのが特徴だ。それは自分の書いた作品が、全国
の多くの人の目に触れる機会が多いと言うことだ。これは
物書きのシニアには大変ありがたいことである。こういう
エッセイコンクールがもつとあつてよいのではないか。

今回の作品を読んで、それぞれの貴重な体験が興味深
かった。質的な問題、クオリティーはいろいろある。しかし、
それはそれで、どうしても自分が書いておきたかった内容
は、相手のところに伝わるのである。そういうわけで、今
回は熟達したシニアのエッセイの味を楽しむことが出来た。

最優秀賞は「トドを殺すことは自分達を殺すこと」が選
ばれた。この作品は社会批評の作品として通用する作品で
ある。従来このコンクールの最優秀賞作品は、今まで毎回
文芸的な作品が主流であつたが、今回は社会批評としても
通用するこの作品が選ばれた。内容的に力がこもり、今の
時代に我々が見詰めなければならぬ、環境問題をしっか
り提起して好感が持てた。

優秀賞の喜多木常雄さんの「暗闇を走る足音」は満州で
の敗戦の様子を書いている。敗戦とともに、今まで中国人
に勝手放題をした日本人に、中国人からの報復が始まった。
日本人は食料が手に入らず困窮した。しかし、そういう報
復する中国人ばかりでなく、作者の家族の元には、深夜に
足音が近づいた。そして玄関先に紙に包まれた野菜や肉や

入った、その二年後父親が認知症になり母親と別の施設に
入った。ところが、母親の入所していた施設の経営が破綻
し、入居者は外の施設にふり分けられた。たまたま父親が
入所している施設に母親が入ることになった。そして一ヶ
月後に母親はその施設で亡くなった。Kは入所費用を払う
ためその施設に行くと、事務員がKに二人の様子を話した。
それによれば、「父親は北館、母親は本館に入居していた
が、毎日お昼ご飯が終わると、毎日待ち合わせたように二
人は和室リビングの縁側に座る。そして丁寧な敬語を使
いながら二人で話していた」と言うのである。元夫婦だった
とはいえ、認知症同士お互いが誰かわからない。しかし、
二人は本能的に感じるものがあつたのだろう。実にシニア
には胸迫るエピソードだ。

佳作の高谷紀久子さんの「猫と私」は、心に残る猫の話
である。猫が家にやってきたのは、それを必要と考える神
様のおぼしめし。それは実際猫を飼うとよくわかることだ
である。

その他に心に残った作品をあげておきたい。

近藤幹夫さんの「養老院」はシニアの現実をよく書いて
いる。死ぬ前に病院に向かうとき「あれの施設に寄つてく
れんか」と、施設にいる妻を思う夫の気持ちがない。

山内丈さんの「ものの見方」は伝わる所があるよいエッ
セイだと思ふ。しかし、横書きはどうか。

佳作

- 「墓に手錠を手向けたい」 梶木冨氣
- 「カエル」 田中浩司
- 「さまよう猫たち」 高岡啓次郎
- 「札幌ラーメンの思い出話」 中村行寿
- 「酒は微薫に止むべし、じゃ」 阿久根ケン
- 「猿の脳みそ」 林勢津子
- 「ザンビアの夜」 松原泰子
- 「平成の大震災(昔むした石碑)」 渋谷江津子
- 「幻覚の色彩―こわして、気づいたこと」 高橋和彦
- 「トイレの月」 マツイアキラ
- 「介護しない」という選択肢 望月ひろこ

これからの応募を考えている人に伝えたいのは、特にシニアの皆さんは、どうしても自分が書いておきたいことを書けばよいと思う。文章の完成度などを気にする人がいるが、初心者にはそれは大事なことではない。時間をかければ誰でも文章はうまくなる。コンクールの場合、まず何を伝えたいかが問題だ。誰も知らないこと、どうしても誰かに伝えたいこと、文章は荒削りでも、その思いをしっかり書くことだと思おう。ちまちました小手先の表現など、いちいちこだわる必要は無い。それよりもインパクトのある世界、思いを私は第一に考えている。来年もどうしても自分が伝えたい、そういう題材での応募を期待している。

- 「会えて良かった」 上杉 辰
- 「パリでの思い出」 嬉代子
- 「十五歳の春の友」 寒川靖子
- 「詫言」 斉藤はな絵
- 「人魚姫は発達障害」 愛甲無子
- 「結婚二年目の悪夢」 藤井典央
- 「失敗覚悟の結婚」 椿 真奈美
- 「縁は異なるもの」 シンジ
- 「もの言う背中と一枚皮」 小林きみ子
- 「ヤブもまた名医」 柴田節子
- 「猫と私」 高谷紀久子
- 「ポジティブに生きる男からの教え」 須貝 誠
- 「いい日旅立ち」 瀬戸清子
- 「団塊の世代」を生きる 熊谷一郎
- 「ガラスの心」 飛鳥涼子
- 「オリンピックの季節の後で」 大島直次
- 「ひとりぼっちで旅立っていった、母への懺悔」 墨島錠
- 「夫婦のかたち」 だいちゃん
- 「冷たい手」 牧 康子
- 「最期の幸せ」 金田一 淳
- 「蠟梅」 橘いずみ
- 「クリスマスローズ」 下村きよ子
- 「ステンレス鋼」 小倉一純
- 「父のメモ帳」 水島恵子
- 「夢のちよつと手前の場所」 森岸真鳴
- 「知らない海」 山本ワタル



いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ
79 「流瀆の島」で群像小説賞受賞
新人長編小説賞受賞
98 「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞
2002 「鉄の光」で健友館文学賞受賞

原爆の引き継ぎ

五十嵐勉

第十四回の「文芸思潮」エッセイ賞は二つの特徴が見えた。一つは全体のレベルが上がり、力作、秀作が例年よりも多かったことだ。底が上がつていることを感じた。入選、佳作も増え、奨励賞、優秀賞もどれを落とすかに苦労した。三次予選以上の層がきわめて厚くなっていた。

しかし最優秀賞のトップワン、またはトップツーに、わずかに物足りないものがあった。これが二つ目の特徴である。今年是最優秀賞が出ないかもしれない、と思いつつ、激論を予想して選考会に臨んだ。私とすれば、もし最優秀賞が出るとすれば、中村郁恵氏、原爆被災者の次世代への引き継ぎを真摯な姿勢で書いた「継ぎゆくひと」と思ったが、蓋を開けてみると、意外に他の選考委員の支持が得ら

社会批評

- 「神社の境内で」 山田葉月
- 「心の相続」 坂元淳子
- 「魅力ある美的指向を目指して」 大出光一
- 「K子さんのプライド」 富田真子
- 「霊は幻か実体か」 西島雅博
- 「宣誓」 カートトシ
- 「父」 石井良武
- 「また来ます」 此木ミツル
- 「ピアノと困った顔の物語」 流川千里
- 「幾代伯母」 青柳みすず
- 「アザ」 下釜美和子
- 「あの日から二〇一一年三月一日」 吉田宏子
- 「母の長い眩き」 龍島彊子
- 「二十年後の約束」 草野修一
- 「私の南極ものがたり」 森岡 昭
- 「義母の生き方」 田中 誠
- 「ワルナ ワルニ」 不破しまと
- 「ものの見方」 北御門 涼
- 「スーパージェイ」 藤井杏子
- 「映画『ゲッベルスと私』」 熊谷和代
- 「西郷も大久保も喜んでる」 宮島孝男
- 「スキマのこと」 浦島智緒
- 「ポピュラー映画、どこへ行く」 井口海斗
- 「贈り物に込める」 高岡隆一郎
- 「失われた尊厳」 森崎律子

れていなかった。この作品には、被爆者との文通を通して、実際に会い、生の声とその生きる姿勢から、伝承すべき何かを引き継ぐという、その真剣な姿勢に、悲慘を見つめるゆるぎない眼があった。それは信頼できると思った。原爆被爆者は老齢化が進み、いままさに鬼籍に入ろうとしている。肉声を聞くことができなくなるそれを、どのようにして引き継ぎ、未来への力として保持していくか、それは私たちの世代の大きな役割である。風化させてはならないその意志を、どのように強く示すかは、核時代の現在の足元を示してエッセイとして重要な骨格になる。この作品はそれを有していると思った。優秀賞に留まったことは無念である。しかし考えようによっては、易く頂点に立たず、それからさらにどのように引き継ぎを深めていくか、次作にあるいは作品化されなくてもさらに実質的な展開を期待することによって、いっそう強化された繋がりが得られるかもしれない。その可能性を残しての優秀賞であることを確認したい。

付け加えて言えば、以前は太平洋戦争を振り返る作品がかなりあったが、年々その領域は少なくなっている。戦争当時の肉声を聞くことができなくなっていくこの傾向はいかんせん押し留めることはかなわない。だからこそ、引き継ぎという行為を通していかに次世代へ繋いでいくか、重要な課題がそこにあることは自覚すべきだろう。

代わりに浮上してきたのが、福島由華里氏の「トドを殺すことは自分達を殺すこと」である。これは北海道の海で殺されるトドのダイバーからの告発で、地球の環境問題と絡めて鋭い社会批評の剣先を有している。しかし文章として甘い所もかなりある作品で、当初のペンネーム「北のダイバー」も最優秀賞としては軽すぎるし、タイトルも長過ぎる。最優秀賞に届くかどうか、しかし、ここにある熱情は確かにいい、一同迷っているところへ、水木選考委員が、火花を打ち上げた。「これまで社会批評賞が最優秀賞になったことはない。そういうケースがあってもいいのではないか」と。さすがに、卓見ではある。この声をだれも否定できず、この火花に目を奪われる形になった。若干修正を施してもらったことで、受賞に決まった。この作品のいいところは、海に潜るダイバーとしての実体験がしっかりとっていることと、指導者の考えや読書による思考の深まりに、普遍的な説得性があることだろう。海の生き物と地球への愛がある。ここから発せられる熱い思いは本物である気がした。

優秀賞はいい作品が目白押しで、絞るのに苦労した。最も高かったのは、高橋恵里花氏の「枕飯」である。これは膵臓癌で死ぬ祖母の少しずつ食欲が細くなっていく心身の衰えを身近に見つめて、その死に添えられた茶碗飯との対比に、死と愛惜を描き上げた優れたエッセイである。素

入選

- 「戦争の悲劇」 岩谷隆司
- 「不器用」 九条之子
- 「チヨコレートと涙」 池上 蓮
- 「能面アクトレス」 吉村紗菜
- 「母が私を描写した」 黒川路子
- 「『精神を病む』ということ」 森 惇
- 「箱」 寿々木
- 「白日」 華央子
- 「長女に仕返し」 紙屋里子
- 「整形外科の病室」 早月春美
- 「長崎の鐘」 森千恵子
- 「農作業に汗する男」 佐藤義弘
- 「猫奮闘記」 河井みかこ
- 「初めての広島、今でも蘇る」 折乃笠公德
- 「六十九歳」 田中恵子
- 「定年後の生き甲斐」 矢口慎三
- 「未知との出会い」 宮尾美明
- 「母からの贈り物」 久保田鶴子
- 「恨みに恨んだ父母との関係」 Kotori
- 「任運騰騰」 三浦洋子
- 「声」 夏 熱田
- 「崩壊」 中武 寛

社会批評

- 「決断」 うらやすうさぎ
- 「夢の萌芽」 佐藤勝美
- 「父の散髪」 ブン・ブンコ
- 「小学生のシニョリッジ」 相良勇次
- 「生きた記憶と奇跡の日々」 蘇芳夏生
- 「知らずを知る」 水野由貴
- 「人生を変えた一本のビデオ」 佐藤清助
- 「南海に散華した父」 川口正浩
- 「父と子」 上野 達
- 「優しい雷」 菊池満子
- 「ミルク」 大神田由美
- 「ろうそく一本消えるまで！」 鈴木正治
- 「ジイジとシユン」 片山二郎
- 「コーヒーの私から紅茶の私たちへ」 房田小百合
- 「遅れてきた葉書」 高澤宏至
- 「四十過ぎ、コールセンターのバイトとボルノ映画館の一日」 鈴木あきら
- 「『豚天使』任命」 櫻川ふみ
- 「喫茶店客のマナー教育」 前岡光明
- 「なぜ『聴覚障害は特殊過ぎる。』と言われるのか？」 横山典子
- 「失業にともなって」 紀美子イエガー
- 「バラリンピックの現状を杞憂する」 徳安利之
- 「限界集落」 川畑和嗣

直に、繊細に見つめる目がいい。文章のリズムは生きている。弱冠一九歳でこれだけの文章が書けるのは、特別な才能を感じる。小説も書けそうな可能性を感じた。

今回原爆に関する作品がいくつもあったが、山家衛良氏やまがえいけんの「少女は何をしていたか」は特に異色で、まったく新しい角度で原爆の凄まじさを露わにした筆致には驚嘆した。私もかなり長く原爆のことを追ってきたが、このような視点でアプローチした文章は初めてである。貴重なルポルタージュドと思った。写真の中心にいる少女の動きと周囲の被爆者の無関心の間に、確かに裂け目がある。そこに覗く裂け目こそが原爆の凄まじさを物語っていることは、言われるまで気がつかなかった。注目に値する作品であり、多くの人に読んでほしいレポートである。

「人間六度」という変わったペンネームの作品はタイトルも「港の時代」と風変わりだったが、不思議にさわやかな印象がある。内容は一九歳で白血病になった闘病記で、激烈なことを淡々とした筆致で記している。「長い絶食期間は味覚もダメにしていった」とか「身長一七〇センチが三二キロを割る」などは、病を乗り越えた者にしか書けない文である。ペンネームも、浮薄な根拠ではなく体温が三六度という境界体温に基づいていると聞いて納得した。その苦闘の時代を「港に停泊していた時代」と突き放して見ているところに、乾いた明るさがある。この明るさは期

直後にその生徒が死んでいく話である。ホロツとする哀調が子供たちの音楽の中に残っている読後感を醸してくれる。優秀賞でもおかしくなかった作品である。

「食む喜び」（豊田崇久）は、飲み食いできない病が赤ん坊を襲い、離乳できないまま命の危機にさらされていたところを、いきなり固形食を与えて自力で囓む力を得て助かるストーリーで、幼い生命力を見せて感動的である。人間の根源的な力をあらためて見せられる気がした。

「私の愛したお医者さん——三日間しか生きられなかった命」（上坂明美）は、癌にかかってお金もなく自殺しようと思っていた筆者を「五〇ドルあったら三日間生きられるよね。三日間生きてから死んだらどう？」と励まされ、救われる話である。このオーストラリア人の医師の言葉と姿勢には、命に響く強い声があり、それが国を越える普遍的な力を備えていることに深い感動がある。文芸思潮エッセイ賞には現代を象徴する国際的な題材に優れたものが多いが、今回その領域ではこの作品が最も光っていた。

「徒歩十五分、美を探す旅」（八ノ瀬葉子）は勤めのあとの最寄り駅から自宅までの一五分の風景の美しさを感性豊かに綴ったもので、普通は顧みられることのない自然の細かな絵模様を絢爛豪華な美の宴として受け止める感受性は素晴らしかった。これは過去の病によって研ぎ澄まされる神経に助けられての一面があるにしても、普段我々が感受

待できると思つた。

松岡久仁子氏の「癌紀元後の世界」も変わった癌闘病記で、癌を客観的に見ているその距離感はその独特のものである。「治療とは消費なのだ」、「なんか、もう、癌に飽きちゃったんだよね」という言い方は、普通はその苦しみを通してはとても表現できないもので、この裏側に当事者の凄まじい世界が垣間見える。「生きる」ということを「治療」に投資していた」などは普通は言えない言葉である。癌への既成的な考え方を突き破る視点が確かにあるので、社会批評の意味を込めての優秀賞となつてもいいと評価した。飯島ともめ氏は九十七歳の高齢で、この年齢での優秀賞受賞は過去に例がない。「少年」は、近くの農業高校の生徒が花を売りに来て、それを買うシンプルな内容だが、少年たち一人一人の手を握っていく行為は新鮮で、その掌の感触が伝わってくる。人間のみずみずしさが広がってくる。衰えないばかりか逆に人の触れ合いの原点をさすがしく見せてくれる感性には脱帽した。

残り三作の優秀賞作品は、他の選考委員の批評に譲りた

い。奨励賞にもいい作品がたくさんあった。「郵便馬車の鈴は鳴り響いて」（菱川町子）は、いつも全体についてこれない厄介な生徒を音楽会のクシコスポストの鈴を鳴らす役目につけてやっと成功した喜びに盛り上がるものの、その

する世界の根本的な奇跡の美しさを浮かび上がらせるものとして意義深いものがある。足元を洗い直される気がした。今回福祉時代を象徴して、介護関係の作品も多かったが、「介助、赤ちゃん、神と死者」（茂木秀之）は、介助の根本を支える考え方に、生まれてきた赤ん坊への未来への力を重ねることによって一歩新鮮な積極性があるところが光っていた。「摘便」という肛門から指を入れて取る言葉と行為も初めて知らされる現場のリアリティがあり、それを越えての赤ちゃんへの思いが、確かに神にまで思いが及んでもおかしくない自然な流れをなしていた。この思想の下で実践することは、より大きな力を生んでいくだろう。

ひと味違った奨励賞作品である「貧乏性」（三上悦子）は、幼い頃の貧しさが命に関わる体験やコンプレックスなどとともに染み着き、その儉約する生活習慣がかえって熟年になって生活を豊かにする方向へ膨らんでくる逆転の人生模様を描いて、よい味を残してくれる。確かに昭和二十年代、三十年代は多くの人が貧乏だった。そこから這い上がる力が経済成長の原動力になっていた。その下部に横たわる耐える力としての儉約精神の光をこの作品は鮮やかに浮かび上がらせている。

「母の富士山」（村松佐保）は、白血病の母の介護と最期の看取りのうちに、父と母の葛藤や自分を煩わせる入院の日々を辿りながら、母の目に映った富士の姿を鮮烈に思い

浮かべるエッセイである。この最期を迎えた病人の目に映る富士の清々しさが、命の意味を問いかけて生きるよすがを復活させる。回顧と発見が新たな生きる力を呼び起こす深いテーマを立ち上げている。

「老いの偏屈」（高橋惟文）は、健筆を感じさせる社会批評で、その地方の山林がゴルフ場建設によって危機に瀕した状況から脱する過程を記録している。筆者に一貫した正義を貫く姿勢が気持ちいい。これを支える背骨は、ここには見えてこないが、体験に根ざした強靱なものがあるように見える。正しさを裏打ちする人間への愛が密かに匂っている。

振り返ることのなかに夫婦愛を深く再生させた作品も、ほのぼのとしたぬくもりを感じさせた。「『ううん、いいねえ』の意味するもの」（林須磨）も、旅行の誘いに妻への思いやりを含んで曖昧に返事をしたまま、黄泉路を辿った夫を愛惜する筆の流れがやさしさに満ちている。

佳作や入選にも印象に残る作品がたくさんあった。「ステレンス鋼」（小倉一純）の工場作業で指を切断する過酷な現実、「アザ」（下釜美和子）の海での特異な体験、「人魚姫は発達障害」（愛甲無子）の一人の障害者の軌跡、「トイレの月」（マツイアキラ）の異国でのジプシーとの食事、「私の南極物語」（森岡昭）の南極探検記録など今も胸に鮮やかに残っている。また、霊の存在を探った「霊は

幻か実体か」（西島雅博）、いじめの具体例を赤裸々にレポートした「ガラスの心」（飛鳥涼子）、ハンセン病問題の実体に迫った「失われた尊厳」（森崎律子）、性犯罪の過ちから更正した軌跡を描いた「二十年後の約束」（草野修一）、自分のルーツを求めて水俣を歩く「知らない海」（山本ワタル）、妻の乳癌によって記者生活の選択を迫られる「夫婦のかたち」（中島大）、膠原病の辛い闘病の果てに死んで行った妹への愛惜「詫び」（斎藤はな絵）、女性の屈辱被害を描いた「墓に手鏡を手向けたい」（梶本牙氣）、多系統萎縮症がさらに進行した状況への覚悟を示した「介護しない」という選択（望月ひろこ）など、人生の深い苦悩や痛みを教えてもらった。少し直せばもっとよくなるかと惜しまれる作品も少なくなく、「蠟梅」（橘いずみ）もその点で記憶に残っている。

総じて、それぞれの日常や人生での深い体験が、生きる世界の厳粛な多様性を見せてくれた。それぞれの人が堪え、乗り越えて一度きりの人生を生きている。それをこういう形で共有できたことは、大きな喜びである。次回も期待したい。



みかみ ひろし

作家
1945 山梨県甲府市生れ
法政大学中退
1982 「三日芝居」で
すばる文学賞受賞
著書 「三日芝居」
「花供養」
「月と五人の男」

書くことのはじまり

三神 弘

最優秀賞の福島由華里「トドを殺すことは自分達を殺すこと」は、「ろくに水泳もできなかった私」が北海道の積丹でスキューバダイビングを始め、「水底で必死にスキルを練習していた」とき、野生のトドに出会うことからはじまっていく。そして「積丹へ通い詰める」ようになったという。「彼らはいつも、音もなく突然現れる」「私達の顔を興味深げに覗いてくる」「手を広げれば真似して前鰭を広げたりしてみせる」「攻撃してくることは絶対になく」と紹介され、読者は、野生のトドに直面することになる。

作品は、「今まで生きてきてこんな感動があったろうか」という発見、自問が、「愛する人のことを大切にしようように、母なる地球のことも愛と感謝を込めて、大切にし

ていけたらと思う」という意識の高まりとなっていく。この作品の読みごたえは、地球環境への問題提起といったテーマが先立つのではなく、一人の女性の海への親しみ、憧れ、体験からはじまっていくことだ。いわゆる論の展開にはならず、ドラマを読む楽しさがある。

ドラマのなかには、積丹で「四十年間も北海道の海を潜り続けて」いる人が登場し、「人の言うことや撮った物ではなく、自分で潜り、自分の目で見て体感し、それを伝える」とさとされる。「トドが暮らせる海でなければ、俺たち人間も生きていけねえんだ」という漁師にも、トドを「エタシペカムイ」と呼び、「海の神」としてきたアイヌの人達とも出会うことができる。

作中の「潜り始めた頃、スキルがなかなか上手くできないのと、あまりに偉大な海を、いや地球を、いきなり全身で感じてしまったのとで、よく帰りのボートの上では人に気付かれないように泣いていた」は、美しい。「自分の存在」を問いかけてくる海が、読者にせまってくる。

優秀賞の武中彩「ピアノ」は、「四十数年間大切にしてきたピアノ」と、ピアノとともに育まれてきた家族の歲月である。ピアノは「私」が娘時代に母が購入したもので、当時は「贅沢品」だった。ところが翌年に、母は突然他界してしまい、「形見」となってしまう。作品は、この母を偲びながら、ピアノにまつわるエピソードが回想されてい

やがて、ピアノを弾いていた子供たちも成長し、それぞれ家を出て独立すると、いつか「私」も六十代となつていく。そして「このまま我が家に置いておくより、これからピアノを学ぶ若い人に弾いてもらうほうが、このピアノがもつと生きてくる」と、手放すことを決心する。そして別れたピアノの行き先を思いつつ、「きつと今頃どこかで新しい出会いに恵まれ、素敵な音を響かせているにちがいない」と、安堵する。

作品は、ピアノを家族として、しかも、主人公として、また、命あるものとして描いていく。ピアノに母を重ね、子供たちとの記憶をたどっていくように、音色を聴いていく。弾くことはないものの、孫たちの演奏を聴いていた父もいる。さらに「私」は、退職後の人生を、ピアノとの思い出によって、励まされてもいく。おだやかな、作法にのっとった書き振りで、構成も工夫されていて、読者に手渡すものも多い。

優秀賞の高橋恵里花「枕飯」は、肉親の死を、初めて体験する。「祖母は末期の膵臓がん」で「自宅療養を始め」「白いご飯だけを一口、二口と食べていた」が、そのご飯を残す日が続き、「全く箸をつけない日」もある。「また一緒に温かいご飯を食べられる日が来ると信じていた」とあり、食べ残した冷やご飯が「まるで祖母の体温をうつし

ている」ようだ、見ていく。作品はいわば祖母の食卓の風景であり、食べることをとおしての、死にいたるまでの観察である。

作者は、「食べる」ということにおいてのみに、眼差しを向ける。生きること、死ぬことへのおざなりの観念もなく、ありきたりの感情も排して、祖母の食卓だけを注視する。素朴さが、的確さになっている。「祖母の出棺のとき、何かがしゃんと割れる音が聞こえた。音の鳴る方へ目を見かけると、雨が染みたくコンクリートの上に、割れてバラバラになってしまった祖母の茶碗があった」とも報告する。

題名の「枕飯」が、作者にはほかにたとえようもなく、まことにやりきれない。祖母が「食べ残したご飯」「冷たくなってしまったご飯」「電子レンジでチンしてももう食べられないご飯」を思わせ、通い合っていく。

優秀賞の人間六度「港の時代」は、「一九の浪人中に白血病になり、移植治療をしたものの食事をする能力を失った」ことから、物語もはじまっていく。病院にいても、ベッドに横たわっていても、人間にはただ患者というのではなく、生きるスタイルというものがある。それは「意識」のありようであり、闘病は「僕」に肉体を客観視する勇氣をもたらし、精神の領域を広げさせていく。題名にも、余裕がある。



たづき たかひろ

1978 山梨県生まれ
東海大学文学部卒
2002 「看板屋の恋」で第91回文学界新人賞受賞
「狼を見る」(文芸思潮)「ご眷属様ジャーニー」(三田文学)他「長者屋敷の寝られぬ座敷」(合作)で佐々木喜善賞など構成作家としても活動中

表裏ナンバーワンと裏々ナンバーワン

都築隆広

今年の選考会には山梨日日新聞のカメラを持った女性記者さんがいらしており、「メディアだ！ ニューススペーパーだ！」とハイテンションで始まった。

毎年、応募作品の平均水準は右肩上がり。今年は優秀賞候補だけで、十作品になってしまった。最優秀賞なしで、全部、優秀賞でええじゃないかと思っていたら、水木亮選考委員から「社会批評賞を当選作にしてみては？」と穿った提案が飛び出した。確かに、社会批評賞が当選作となつたことはない。「それだっ！」と飛びついて、「トドを殺すことは自分達を殺すこと」が当選作に決まった。

だが、冷静になってみると「えー、トドオ？」と多少ならずとも不満が洩れる。自然への愛だけでなく、人間へ

の関心や師弟関係も描かれている点は評価できる。ただ、書いてあることが少々、純真過ぎる。もう少し屈折し、薄汚れた人間性を披瀝してから「トドを殺すな」といった方が、私だったら真摯さを感じるが……そもそも、薄汚れた人間はトドなんて気にかけないか？

インパクトの弱さで「トド」に王座を譲ってしまったのが、武中彩さんの「ピアノ」だ。審査員支持も高く、裏ナンバーワンともいうべき作品だろう。ピアノが中流家庭の憧れだった昭和の時代を切り取る、ノスタルジー感覚が秀逸だった。当選作になって欲しかったものの、五十嵐編集長の「私の家は貧乏で母親が姉のピアノリストへの夢を叶えるために血反吐を吐く思いでピアノを買った。ピアノへの思いはこんなもんじゃない」という発言に「ですねー」とヘタレてしまった。

その他、優秀賞に推薦した作品は「港の時代」と「天恵戒駱」。「港の時代」は若くして白血病を患った語り手の闘病と再生の記録で、結末部分は今回、読んだ作品の中でも一番、清々しかった。

透明な津波という、我々が想像だにしない題材を選んだ「天恵戒駱」には度肝を抜かれた。題名になっている造語は審査委員一同に大不評だったが、あの震災時の衝撃的な津波映像を観て「なんでこの町だけ、津波の水が綺麗なんだ？」なんてことを考えられる人間がいたことに驚きを

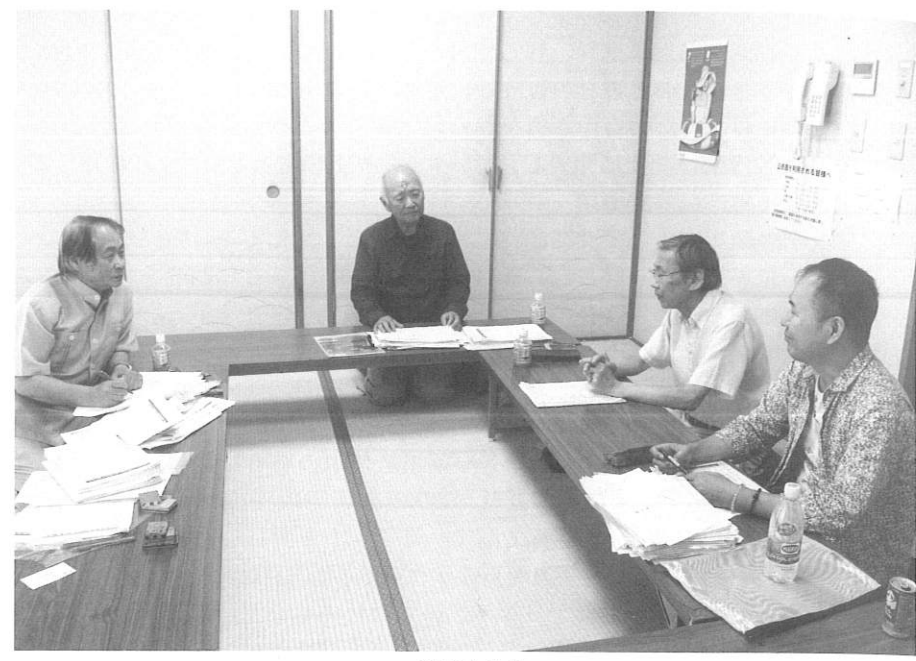
隠せない。稀有な着眼点である。

奨励賞で印象に残っているのは「人形の恩返し」と「忘れえぬ『イエスタデイ』」。「人形の恩返し」はお気に入りの人形を玩具修理に出した話。家族間の会話が生き生きして、特に父親のことをボロカスにいつているところが笑った。「いくらなんでもお父さんが可哀想だ」と五十嵐編集長が嘆いていたものの、本当に仲が悪い父娘だったら、こんなに会話をしないとと思う。

校内暴力が全国で吹き荒れていた時代に女教師とリンチに遭った女生徒との絆について語られているのは、田中美晴さんの「忘れえぬ『イエスタデイ』」。まさに「3年B組金八先生」の加藤優で有名な「腐ったミカンの方程式」な時代である。リンチに遭った生徒の苦悩は勿論のこと、暴力を振るう不良達と対峙する教師側の恐怖も描かれている。斬新だ。

奨励賞よりも話題作が多かったのは佳作。山本ワタルさんの「知らない海」は作者が高校生の頃、先祖の墓を探して水俣市を訪れる話。まるで青春小説のような語り口で「作り話なのではないか？」という声も出た。だが、作り話なら明確な結論が出たろう。曖昧なまま終わるところにリアリティーを感じつつ、物足りない点もあった。

鈴木正治さんの「ろうそく一本消えるまで！」は赤線の時代に少年が普段、優しく接してくれている娼婦の人々を



選考会風景

心ない言葉で嘯し立てて、しこたま怒られる話。浅慮な感じと不可思議な衝動が、いかにもな子供心であり、少し前にインターネットを騒がせたバカッターやバイトテロの人々とも通じる幼稚さがあって、妙に生々しかった。

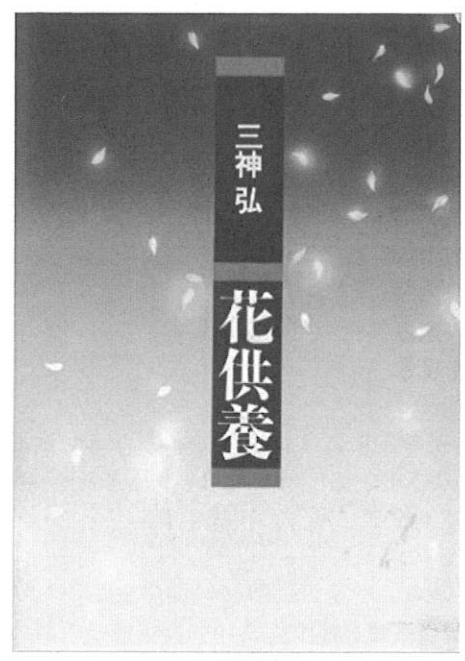
同じく佳作、梶木冴氣さんの「墓に手鏡を手向けたい」はセンサーショナルな作品である。上位に食い込んで欲しかったが、あまりに過激な内容に入賞がやっとだった。ある大病院の医者やスタッフ達が、患者で後に看護師となる語り手に盗撮やセクハラを行っており、それを組織ぐるみで隠蔽してきたのを告発する内容だ。にわかには信じられないぐらい悪質かつ陰湿なセクハラで、書かれていることに誇張がなく、真実だったとしたなら、病院の経営が傾く規模のスキャンダルになりかねない。病院名は作中では伏せられているが、我々としても真相を確かめる術もない。「こりゃ、危険過ぎる」という理由で佳作になった。

何年かに一度、この賞には凄まじき投稿作がある。鮮烈なるインパクトを残しながらも、過激さゆえに、落選したり、佳作や入選に留まったりして、上には行けない。裏々ナンバーワンというべき作品だ。裏の裏なら表じゃないか？ というツツコミは置いて、斯様なエッセイにも花を手向けたく、あらずじを紹介した。

活字にできるかできないか、瀬戸際の作品にも才気は宿っている。



第7回健友館文学賞大賞受賞！
「彼らは何を語りたかったのか」
タイ・カンボジア国境の難民村。詳細した描写で黒焦げになった数多くの死体が散らばっていた。
健友館



集英社刊

五十嵐勉カンボジア難民小説第2弾
御注文はアジア文化社まで
1600円

福島由華里

トドを殺すことは自分達を殺すこと



彼らはいつも、音もなく突然現れる。静まり返った冬の日本海の深いブルーの中からもすごいスピードでビュンツと泳いできて、一瞬横目で「なんだお前ら？」と言わんばかりに私達をギョロツと見た後、あっという間に消えていく。そうかと思えば、大きなものでは体重一トンにもなる巨体を左右にゆらゆらと揺らしながら、私達の周りを何度もぐるぐると旋回したり、頭を逆にした姿勢でピタツとホバリングしたりしながら私達の顔を興味深げに覗いてくる。さらに懐っこいものは、私達が手を広げれば真似して前鰭を広げたり、くると一回転すれば同じように回転したりしてみせる。時には弱い力で私達の頭やフィンを甘噛みしたり、私達が泳ぐ後をずっと付けてきたりする。しかし、攻撃してくることは絶対になく、まんまるい目には愛くるしささえ感じる。今まで生きてきてこんな感動はあったらうか？ いや、間違ってもなかったと断言で

きる。何度会っても飽きることがない。会えば会うほど虜になる「彼ら」とは、冬になると遠くロシアから北海道へ回遊してくる、野生のトド達である。毎年道外からわざわざ寒い北の海へ、彼らに会うためだけに潜りに来るダイバーも少なくない。

う一心で、何かに取り憑かれたように積丹へ通い詰めるようになって。ろくに水泳もできなかった私を体験ダイバーからインストラクターまで育ててくれた積丹のダイビングショップの藤田氏は、私のことをとても可愛がってくれ、今ではもう一人の父親のような存在になっている。四十年間も北海道の海を潜り続け、野生トドを徹底的に観察、調査してきた人物だ。ダイビングインストラクターとしても、PADIというダイビング団体の、コースディレクターという最高ランクのインストラクターに日本で最初になった人である。彼に付いて八年間、積丹を中心に北海道の海の中を四〇〇ダイブ以上見せてもらってきた。彼の教えは、「海が先生」というもので、「人の言うことや撮ったものではなく、自分で潜り、自分の目で見て体感し、それを伝えろ」と常々私達に言っている。それには私も同感で、自分で見たものと経験したことが全てという信念でこれまで潜り続けてきた。

私と野生トドとの最初の出会いは八年前の二〇一一年三月、北海道の積丹でスキューバダイビングを始めて二日目のことだった。水底で必死にスキルを練習していた私に、突然インストラクターが指差したのでその方向を見てみると、遠く水面近くを二頭のトドが優雅に泳いでいた。札幌出身、在住にも関わらず、車で二時間の積丹の海で野生のトドに会えるなんて、全く知らなかった。聞けば、冬にはトドの他にアザラシ、春にはカマイルカやオットセイ、夏にはクジラやシャチまでやって来るとか……。元々動物好きなきなことあり、とにかくそれらに会ってみたい！ とい

らかに減っていること、積丹に回遊してくるトドの数も激減していることを聞かされた。北海道の魚は、鯿が良い例だが、獲れなくなったのは明らかに乱獲が原因だ。私は昔の海は知らないが、今潜ってみても確かに魚は少ない。トドは国際自然保護連合(IUCN)のレッドリストで準絶滅危惧種に指定され、アメリカ、ロシアなどでは当然保護されているのだが、日本では漁業被害を出す害獣としてい

の中で完全なるパラダイムシフトが起きてしまった。それから、ヨルゲン・ランダースの「2052」、シルビア・アールの「ワールド・イズ・ブルー」、アルネ・ネスの「デューブ・エコロジ」などの本を読み漁った。中でも一番印象的だったのは、ドネラ・メドウズの「地球の法則と選ぶべき未来」という本の中で著者が、「危機に瀕しているのは地球ではなく、私達人間の考え方である」と言っていたことだ。「地球環境を守りたい」なんて傲慢なことを考えていた自分がとても恥ずかしくなった。地球は人類などいなくなっても変わらず回り続ける。それどころか、人類がいなくなつた方が緑は生い茂り動物達は絶滅の危機を逃れ、豊かな星になるかもしれない。人間は、「地球を守る」のではなく、「地球に住まわせてもらい続ける」ことを真剣に考える必要があると思つた。

藤田氏からは、積丹の水中で見られる魚の種類も数も明らかに減っていること、積丹に回遊してくるトドの数も激減していることを聞かされた。北海道の魚は、鯿が良い例だが、獲れなくなったのは明らかに乱獲が原因だ。私は昔の海は知らないが、今潜ってみても確かに魚は少ない。トドは国際自然保護連合(IUCN)のレッドリストで準絶滅危惧種に指定され、アメリカ、ロシアなどでは当然保護されているのだが、日本では漁業被害を出す害獣としてい

に登録されたにも関わらず、だ。人間が獲りすぎたせいで海の魚がいなくなり、トドは餌がなくなって仕方なく漁網にかかった魚を食べてしまうのだ。別に漁師さんを否定したいわけではない。私だってお寿司やお刺身は大好きだし、魚が食べられなくなったら悲しい。だからこそ、獲り方を考えなければ将来私達は魚を食べることができなくなってしまうのではないかと思うのだ。それをトドなどの海獣を悪者にして、彼らを殺すことで解決できる問題では毛頭なからう。トドやアザラシの年間の駆除数（駆除枠）は決められてはいるが、大抵撃たれた個体は回収されずに海底に沈んでしまうためにカウントされず、実際は駆除枠の何倍もの海獣達が犠牲になっている。積丹で漁師をしていたある故人は生前こう言っていた。

「トドが暮らせる海でなければ、俺たち人間も生きていけないんだ」と。

最近テレビでは、日本好きの外国人が来日しているところを取材し、「日本は素晴らしい」と外国人に尊敬されているという内容の番組を多く目にするようになった。それはそれでいいのだが、私はこのような海で起きている問題を知らずにそのテレビを見ただけで、容易に日本人であることに誇りを持ってしまうことは大変危険であると思う。私は自分達がしてきたことを棚上げて海獣をいまだに駆除し続けている日本は世界の恥であり、外国人には顔向け

できないと感じている。「世界一貧しい大統領」として有名な元ウルグアイ大統領のホセ・ムヒカ氏は数年前のテレビ番組のインタビューで、「日本人は魂を失ってしまった」と言っている。私達日本人が本場の誇り、魂を取り戻すには、こういった問題から目をそらさずに解決に向けて取り組んでいく必要があるだろう。

藤田氏はこれまでに幾度となく、行政に対してトド駆除の問題について訴え続けてきた。それでも何も変わらなかった。それで彼は、六十六歳になった今も一人でも多くの人に海と海獣達を見せ、一人一人に何ができるか考えてもらうこと、また、大切なことを伝えていくことができる指導者を育てることを目的としてダイビングショップを経営しながらトドの調査を続けている。ダイビング指導、インストラクター養成、水中ガイド、操船はもちろん、料理、船の上げ下ろしとメンテナンス、ダイビング器材の修理等全てほぼ一人でこなしている。冬はさらに除雪作業が加わる。非常勤スタッフ（私達インストラクター）は、平日は札幌などでそれぞれの仕事をしており、海には主に週末行ける時に行ってできることを手伝ったり、時には客としてファンダイビングを楽しんだりさせてもらっている。過酷な環境に身を置き働き続ける瘦せた背中を見るたびに、ショップの将来を考えずにはいられなくなる。私の心を解放して、大切なことに気付かせてくれた場所だから。そし

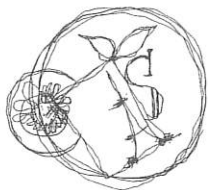
て「自分には何ができる？」と問いかげずにはいられない。

昔アイヌの人達は、トドのことを「エタシペカムイ」と呼び、海の神として敬っていた。水中で彼らに出会って納得した。彼らはまさに神だった。そして私達ダイバーにとっては大切な友でもある。友を失い続けていることに私達は心を傷めている。私達人間もトドも地球の一部であり、地球を汚すことは自分達を汚すのと同じだし、トドを殺すことは自分達を殺しているのと同じだと考える。人間が人間を殺めることが許されないのなら、同じ命を持つトドなどの海獣だって、人間の都合で殺されることは許されないはずだ。自分達がしてきたことは、必ず自分達に返ってくる。それならばトドを守ることで人類を守りたい。

海に潜ってパラダイムシフトが起きてから、私は人間の愚かさに愕然とし、生きる希望を失った。それでもこれまでたくさんの人達に愛され、助けられて生きてきた。だからどうしても人間のことを嫌いになれないのである。自分の愛する人達のことを心から大切にできる人間、どうしたら人に喜んでもらえるか、役に立てるか、いつも考えている人間、常に周りの人の気持ち大切にできる人間、時には自分の命を犠牲にしてまで人を助けようとする人間……。そんな愛に溢れた人間を、私は愛している。そしてその愛が人間だけでなく地球全体に向けられた時、ものすごい力が生まれる気がする。一人では何もできない。人類全員が

一体となることができれば、不可能なことはないだろう。

いつか夢に見たことがある。積丹の海にまた海藻が生い茂り、魚もたくさんいて、トドやイルカなどの海獣達もまたたくさんやって来て、人間達も笑顔で幸せに暮らしている夢を。それを実現できるのは、私達ひとりひとりの愛しかない。愛する人のことを大切にするように、母なる地球のことも愛と感謝を込めて、大切にしていけたらと思う。



福島 由華里

ふくしま ゆかり

1981 北海道札幌市生まれ

2011 北海道積丹町でスキューバダイビングを始める

2015 PADI オープンウォータースキューバインストラクター取得

現在は「地球の健康と人間の健康」を人生のテーマに、北海道大学にて技術補佐員として働く傍ら、ダイビングショップ・ゼムハウス非常勤インストラクター、フォーエバーリビングプロダクツジャパンビジネスオーナーとしても活動中

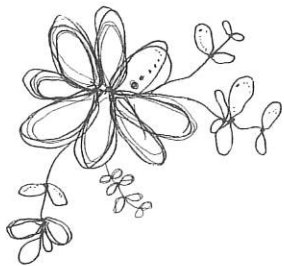
※「ファンダイビング」は「トレーニングダイビング」とは異なり、楽しみ遊ぶのが目的のダイビング。ライセンス取得者がインストラクターの引率なしでパディを潜ること。



受賞の言葉

福島由華里

この度は誠にありがとうございます。大変驚いております。ダイビングを始めてトドに出会ってからですと、やり場のない想いを抱えておりました。インターネット上でこのエッセイ賞を知り、良い機会と思って思うままに書かせていただきましたが、まさか受賞対象になるとは思っておりませんでした。スキューバダイビングや海獣に興味を持っていただいたり、北海道の海で起きている現実を知っていたただく機会になれば嬉しいです。本当にありがとうございます。



継ぎゆくひと

中村郁恵

第14回
文芸思潮
エッセイ賞
最優秀賞

文通とは、もうレガシーな響きなのだろうか。今や個人の通信手段もLINEやメールが主流のなか、折に触れて手紙をしたためたくなる人が、私にはいる。

二〇一三年五月。当時中学三年生だった私の娘は、修学旅行で長崎を訪れ平和学習の一環として「被爆体験講話」を受講した。十数人ずつでブースを作り、それぞれに語り部さんを招き講話を受けるといふ、学校側の伝統的スタイルだった。そして、娘のブースを担当されたのが、Y氏であった。あえて椅子を置かず、膝を詰めて語り部さんと向かい合い直接耳を傾ける。その意義は彼女自身で見出しできた。帰宅した娘は、旅行の土産話よりも先に、掌に隠して持ち帰った宝物をそつと解きだすようにY氏の、あの日から話を語りはじめた。もともと静かな性質の彼女からゆくりと発せられる言葉は、撓んだ食卓の空気を両端から摘まむとひと息に張り直していった。

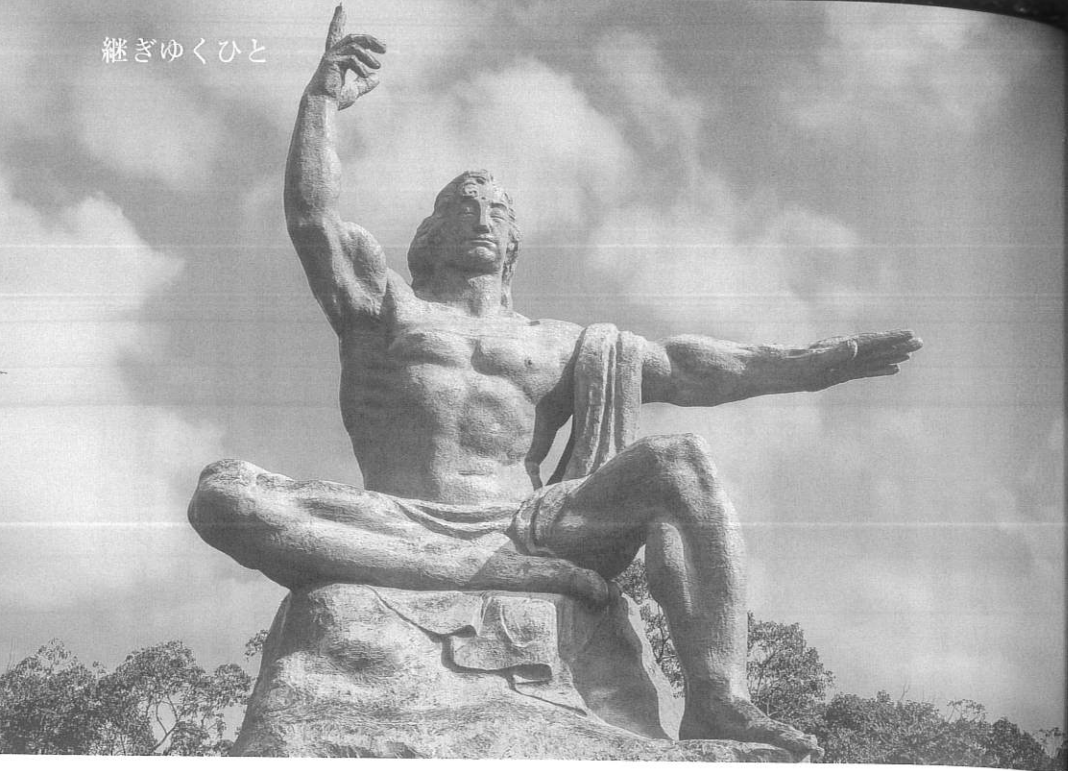
一九四五年八月九日。十一歳だったY氏が双子の弟と留守番をしていた、その一瞬だった。激しい爆風が家中を吹

※レガシー＝遺産・遺物

き抜けた後、ようやく見上げた梁の間からは青空が覗いていた。兄と弟とで父を探しに行く途中、眼前に広がるのは破壊尽くされた街の情景。充滿する惨い臭い。焼けて膨らんだ人。皮膚の剥けた人。瓦礫やあらゆるものを跨ぎに跨いで、やっと辿り着いたのは片鱗を留めていた父の職場。「坊ちゃんたち、お父さん笑っておられますよ」と教えてくれはしたが、そこにいたのは笑ったような表情で横たわる父だったという。職場の人と壊れた橋の側で父親を茶毘に付した。歳月が流れても戦争は曇みかけてくる。合格はしたが全日制に通えず、仕事をしながら夜間高校を卒業。独学で英語を勉強。幾度も幾度も八月九日を迎えた後、鮮烈な被爆体験と深沈の眼差しを言葉にのせて国内外に伝えていく役目を、選んだ。

「お母さん、知っていた？ あの投下はウランとプルトニウムの破壊効果を比べるためでもあったこと。隣でもない真逆でもない。戦争と平和の距離ってどのくらいかな」

十四歳の眩きは、私に音もなく、鏝められ深奥までゆつく



りと沈んでいった。少年から立派な語り部へ、私の内側に臆な輪郭で立ちあがってきたY氏。重く長い歲月の一端を正面から受け止めた娘。三人が意識から外れた磁場で透明に結びついた——たまゆらの錯覚は、違和感のない確かさに私に着地した。

Y氏が語り部になられたのは退職された後という。抱き続けた鍾の数々を伝え残そうと決意されるまでの葛藤と強い使命感を勝手に慮った私は、思いきって万年筆を握った。娘を通して感受したこと、戦争の表面すら知らずにいたことを平らかに綴った。程なく、Y氏から真つ白な便箋に静謐な言葉が並ぶ返信をいただいた。まだインクの匂いが滲む、発行されたての自叙伝『あしあと』と一緒に。実直以外の比喩を要しない面持ちで表紙を飾るY氏の著書には、被爆前後の記録の他にエッセイや小説が幾つも収められていた。Y氏も書く人だったという偶然は、二十年ぶりに原稿用紙に向かい始めたばかりの私を弾ませた。以来、往復の間隔も気の向くまま、長崎と札幌の間で書簡が行き交うようになった。

原爆や戦争の爪痕を以前よりは身近に考えるようになってきたものの、表面的な言葉を並列させる気になれない私は、他愛のない出来事や家族のことを素直に記した。

——気温十℃の中、娘の駅伝大会の応援でした。
——窓硝子にこの冬初めて雪の華が咲きました。

Y氏からも、いつも変わらない漆黒のインクで、やはり家庭人の顔で日々が届く。

——十代最後に読んだ一冊を読み返しています。
——入院中の妻の病院まで毎日運転しています。

さり気なく、自身の講話活動の様子が掲載になった新聞のコピーとそれにまつわる数行も添えて。Y氏は、外務省委託の初代「非核特使」に任命され、国連軍縮フェローシップのメンバーに被爆体験を話された経験をもつ。数年前にはバグウォッシュ会議にも招かれた。英語でスピーチされる機会も多く、非核・平和を願う活躍の場は広大だ。けれど、私に対して強い主張はない。いつも同じ温度で廉直に講話の様子や生活で留めたことが綴られてくる。心では折りの襞を折り続けても、私はあえてありふれた日常を返していった。

たまに、詩作や散文について触れることもある。四年ほど前だろうか。児童文学にチャレンジしたいと、記したことがあった。数日して、買い求めたであろう文庫本が届いた。『君たちはどう生きるか』（吉野源三郎・著）。大ブームになる前兆すらなかった頃だ。

——もうお読みになったかも知れませんが。児童文学のお役に立てただければ幸いです。

長い間生きていただければ幸いです。二歳になる前に生母を亡くした時読み返す段があります。

私には母の想い出がないからかも知れませんが。

この手紙は「石段の思い出」の頁に挟まれたまま書棚とは違う場所で円かに息をしている。

会ったこともない、三十歳も離れた人と何年も書簡が絶えないのはなぜだろう。届く手紙の行間に抽出した太い思念を見るからか。いかなる聴衆であっても揺るがない意志を声に乗せる語り部であり続けるからか。確かに、些細なことでも心の重心がぐらつく私にとって、貫く背中是指針に近い。だが、Y氏が端正に綴る日々景色は、いつでも芽えた感覚を到来させた。坂道を吹き抜ける風音。海の面で翻る陽光。古い本の匂い。見知らぬ街の一片がたおやかに立ち現れては、素直にペンを握らせた。何より奥行きある雅量が、いつも静かに私を待っていてくれるように思えた。会わずにいるからこそ語れるのかと、便箋を捲ることもあった。いつからか会ってみたいと望むようになったが、実現がもたらす重力で、保たれていた均衡が崩れることは正直怖かった。

一昨年、Y氏から体調が優れないとの手紙が二、三度続いたことがあった。入院中の奥様を見舞う毎日。継承活動体調を崩されるのも無理はない。その後回復されたが——一度会いに行くべきだ——直感を実行に移したのは、昨年（二〇一八年）九月だった。ちょうど夏休み中だった大学四年生の息子と大学一年生に成長した娘と三人で長崎の地

に立った。

Y氏との待ち合わせは原爆資料館ロビー。娘だけは面識があるが、果たして私を見てどう感じられるのか不安を拭えずにいた。これまで投函しあつた手紙を思い返しながらか待っていると、時間通りに現れた。皺のない白いシャツのY氏。濃い青色のワンピースの私。憤りや寂しさも奥深くに鎮めたような柔和な微笑みは、私の緊張を瞬く間にほぐした。

「はじめまして、ではない感じですね。はじめまして、ですが」

正直な言葉を告げた。

「よく訪ねて来てくれましたね」

まだ空も緑も夏を脱いでいない午後だった。

「原爆資料館をご案内しましょう」

息子と娘は修学旅行以来二度目、私は初めてだった。堪えた照度の中、Y氏はゆつたりと歩を進めながら、丁寧しかし淡々と展示のひとつひとつを説明してくれた。一九四五年八月九日午前十一時二分の、空気の粒子がまだ沈まず昇華もされずに漂っていた。

「隣の追悼平和祈念館にも行きましょう」

原爆死没者の方々が求めた〈水〉を湛える水盤を設けた祈念館には、誰もいない。Y氏の聡い声が幾重もの小さな輪をなして高い天井を突いた。合掌。沈思だけが求められ

ていた。

——わずかな時間お会いできれば幸いです。

そう綴つての訪問に偽りはなかった。だが、祈念館を出るとY氏は、

「ぜひ我が家に来てください。私が、どこでどんな生活をしているか見てほしいのです」

遠慮したい旨を丁寧に伝えたが、Y氏はそのつもりで運転してきたのだという。結局、少しだけという約束になった。Y氏の家に向かう途中、一つの橋の側でスピードが緩んだ。

「目の前で父が焼かれた、竹岩橋です」

凜とした眩きだった。言葉を探しきれない私は、もう面影はないだろう橋を眼裏に残した。

幾つかの緩やかなカーブを上った高台に、奥様を想いバリアフリーにされた家はあつた。光が淡く届く窓際のテールブルに着く。

「ずっとお会いしたいと思っていました」

平凡な、けれど率直な私の気持ち

「私は、手紙が届くといつもほんわりと温かくなるんですよ」

という言葉で返してくれた。数年分の手紙に書かれたエピソードを細かに解いては絡まることなく、四人の笑い声も織り込みながらわずかな時間を編んでいた。傾いた陽が床に落ちてきた頃、見てほしいものがいろいろあつて

——と、Y氏は席を立った。

被爆講話に必要な資料。継続中の英語教材。クラシックCDの数々。くつろぎ専用のソファ。毎日庭に来る雀のためのパン粉……少し照れながら紹介を重ねていき、

「こんな風に暮らしています」

どれもが主に呼ばれるまで整然と控えていた。生活という分界で歳月を共にした品々が打つ品らかな脈は、私たちの耳元でそつと揺れた。

宿泊するホテルまで送っていたたく車中は、先程までの笑い声を忘れたかのように沈黙に圧された。車から降りた私は、笑顔に努めて、

「また、手紙を書きます」

返事の代わりにY氏は、息子と娘、さらに私へ手を差し出した。交わした掌の厚みと弾力を、私の手指はしばし感じ、それはゆるやかに私の細部まで染み込んでいった。多くの死が訴えるものを背負いながら語り継ぐひとは、生へ繋がる迂遠の道で、日々を丁寧に積み重ねる大切さを継いでいくひとでも、あつた。

札幌と長崎の間を書簡は変わらずに行き交う。手紙を開けば、あの机で書いてくれたのかと、以前より近い想像が巡ります。そして、私は綴る。霞に滲む月の輪郭を見ては

——夕空に春を見つけたと。

陽の柔らかさで選んだ切手も、まっすぐに貼つて。

※参考文献「あしあと」(山脇佳郎・著 長崎文献社)



中村郁恵

なかむら ふみえ

1965 札幌市生まれ

札幌在住

7年前より原稿用紙を広げる

現在、札幌「グッフォーの会」にて詩作を、函館「800字の会」へ散文を送稿し、精進途上

第11、13、14回文芸思潮現代詩

賞奨励賞

第12回文芸思潮現代詩賞優秀賞



受賞の言葉

中村郁恵

感情や思考は、肉体と共に毎日更新される。その中で、かたちやにおいを変えず永く残っていくものがある。心の壁に。皮下の温度として。内に潜むものを顕現するには、言葉に恃むしか私は術を知らない。感知あるいは思慮した事象に親しい言葉を紡ぎゆく喜びと苦しみは相俟って、いつも背筋を伸ばしてくれる。これからも、言葉に対して謙虚に寄り添い、自身を模索しながら綴っていきたいと思う。賞に選んでいただき感謝あるのみです。

少女は何をしていたか

山家衛良

その写真を最初に見たのは中学生の時だった。そこに写る一人の人物に奇妙な感じを抱いたことは、いまだに憶えている。

その少女は小学生、良くて中学生くらいだろうか。やや膝を曲げて腰を落とした状態で、右足が上がっている。何か激しい動きをしている瞬間であるらしい。その姿勢で静止することは不可能なので、他の人々とは明らかに別の事をしてしているはずだ。この少女、一体何をしているのか。

写真は一九四五年八月六日の午前一一時前、広島市の御幸橋西詰で撮影されたもの。核兵器で負傷した一般市民とその混乱の様子を収めた、史上最初の一枚である。少女はその写真のほぼ中央、路上の何かを拾おうと身をかがめている白いシャツを着た人物のすぐ左に写っている。右側には軍服のような制服を着た無傷の人物が身をかがめ、その人物を数名の負傷者が取り巻いている。少女の左には、橋の隅に腰を下ろし、あるいはうずくまり、身を横たえる重

傷者と思しき人々が並ぶ。皆熱線でちぎれてしまったほさほさの頭で、着衣もぼろぼろ、もしくは裸に近い。

因みに、この制服姿の男はすぐ近くの交番の警察官で、火傷を負った人々に応急処置を施していた。逃げてくる人々がひどい火傷を負っているのを見て、近くに食用油の備蓄があったのを思い出し、運んだ一斗缶の油を負傷者の火傷に塗っていたのだ。取り巻いているのは、次の処置を待つ負傷者たちなのだろう。

件の少女は、一見その警察官に駆け寄っているようにも見える。しかし、彼女のすぐ後ろには、橋の隅にうずくまる人々がいる。彼女の躍動と距離感がどう考えても不自然だ。また警察官に向かって駆けているなら、上体が前傾して歩幅ももつと開いている必要がある。何やらこの少女、駆け寄っているのではなく、垂直にジャンプしているように見えるのだ。

最近、およそ三十年を経て、この少女の不可解な跳躍の意味を知ることが出来た。この写真に写る人物の一人が、

この少女について証言していたのである。

この奇妙な少女は、両手で真っ黒なものを抱えていた。その黒い何かに対して、絶叫していたのである。「起きて！起きて！」と。

その証言を知って僕は非常に驚いた。彼女が何かを抱えているように見えなかったからだ。

証言したのは、一枚目の写真では右端に、続く二枚目の写真ではほぼ中央に写る、三角襟のセーラー服を着た少女。河内光子さんといって、当時十三歳だった。

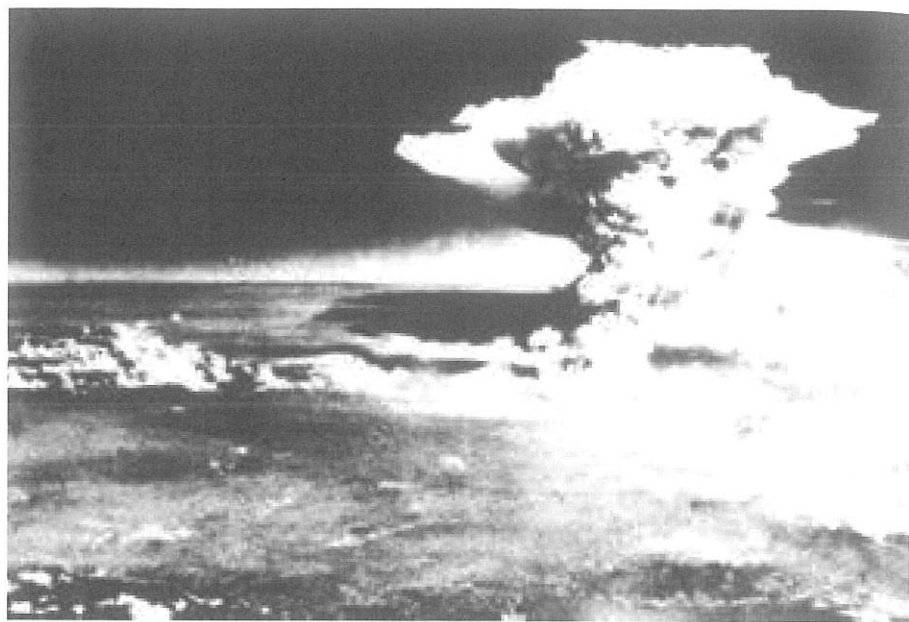
「ものすごい声でした。おさげを結んでいるし、多分お姉ちゃんだと思うんです。真っ黒に焼け焦げて死んでしまった赤ちゃんに、起きて、起きて」と呼びかけて、必死に揺すっていました」

河内さんは、この少女について他の場所でも証言していたらしい。それによると、この少女の絶叫は「起きてや、起きてや」、あるいは「坊や起きて、坊や起きて」という言葉として河内さんに記憶されていたようだ。

河内さんの「坊や」というフレーズから考えると、赤ん坊は少女の弟だったのだろう。おそらく、少女は弟の名前をそのままにしたか、「○○ちゃん」という具合に呼んだのではないか。それが男の子の名前だったことが記憶に残っていて、河内さんが代名詞的に「坊や」という言葉を

少女は何をしていたか





用いたと僕は想像する。
この少女は真っ黒に焼けてしまった弟を抱きかかえ、恐らくは「○○（弟の名）起きて！ ○○起きて！」と絶叫しながら、その意識を呼び起こすべく飛んだり跳ねたりして揺すっていた。この写真には、そうした少女の錯乱状態が写っているのだ。

謎が解けたとき、背中が冷えるのを感じた。少女の哀れさに対してではない。三十年來、自然に見える他の被爆者のありようの中で、彼女一人が奇妙だったように感じていたその印象が、実はまったく逆だったことを思い知らされたからだ。

この少女が奇妙に見えるのは、そこに写る他の人物が、誰一人として少女に意識を向けているように見えないからだろう。

橋の隅に座る人々は、おおよそ写真の奥の方を向いている。その先には、広島街が猛火に包まれており、逃れてくる人々もそこからやって来る。被爆者たちが写真奥の方に意識を向けるのは、極めて自然であろう。

警察官とそれを取り巻く人々も、彼が応急処置を施していることを踏まえれば、皆の意識がそこに向くのは当然だ。こちらは何ら不自然なところはない。

少女はそうした「自然な」場の中で、焼け死んだとしか

思えない赤ん坊を抱きかかえ、恐らくは弟の名を絶叫しながら、その意識を呼び覚まそうと、極めて異常な行動を取っていた。もし彼女が少女ではなく、母親ともみられるような姿だったのであれば、シヨッキンクではあつても奇妙な感じにはならなかったのではないか。

しかし、当時十三歳だった河内さんよりも幼く見える少女がそのように錯乱していたのなら、誰にも疑問が浮かぶはずだ。少し考えれば想像も出来るだろうが、見た瞬間に納得できる光景ではない。

ところがこの構図の中では、皆の少女への意識が完全に抜け落ちている。彼女のすぐ右に写る、身をかがめて地面の何かを拾おうとしている白シャツの人物にさえ、少女への関心が全く感じられない。後にこの少女について証言した河内さんにも、この写真からは少女への意識が読み取れないのだ。つまり、この少女の存在とその在りようは完全に無視されていた。

今まさに猛火を逃れている最中だったり、火傷や怪我で極度の苦痛に耐えている負傷者なら、少女に関心を向けられないのは理解できる。しかし、少女のすぐ右の白シャツの人物がその典型だが、その着衣から深刻なダメージが窺えない人々にさえ、少女への関心が全く読み取れないのはどうしてか。ひとまずは命の危機を脱した、深刻なダメージを負っていない人々にさえ、少女の異常な在りようへの

反応が見られないのは何故なのか。

僕はここで、ナチス・ドイツの強制収容所を生き延び、「夜と霧」を著した精神科医・ヴィクトール・E・フランクルの言葉を思い出す。

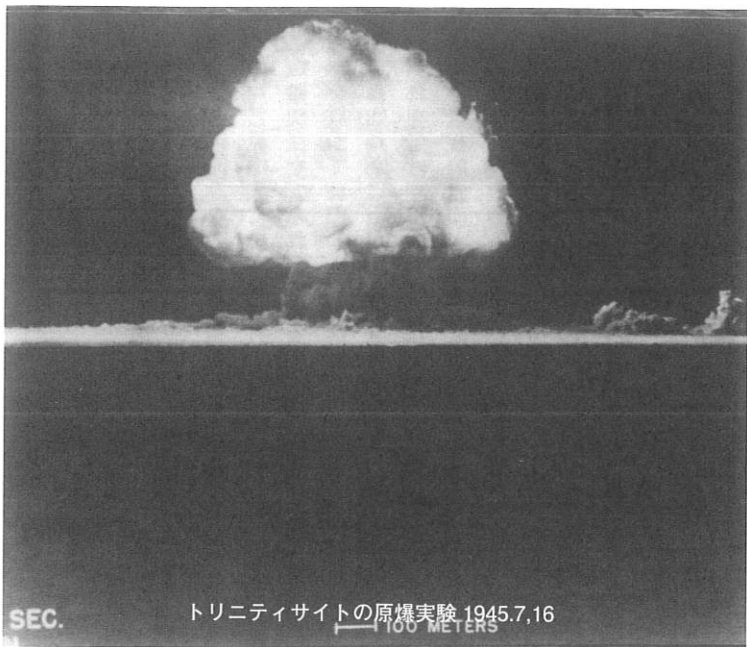
異常な状況に直面した場合には、異常な反応を示すのが正常な人間の在り方なのです。

被収容者はほんの数日のうちに極度のアパシー（外界への無感覚、無関心）に陥り、自分の周りでどれだけ悲惨な事が起つても、関心を向けなくなりました。

ナチス・ドイツの強制収容所とそこでの虐殺は、広島・長崎と並び、第二次大戦における典型的なホロコーストとして語られる。その悲劇を経験した人物の言葉を借りるなら、この写真が写し出す光景をこのように分析できるかもしれない。

少女以外の人物は皆、被爆のショックで極度のアパシーに陥ってしまった。一方この少女は、弟が焼け死ぬという異常な事態を前にして、その弟を抱きかかえ、絶叫しながら意識を呼び覚まそうと異常な跳躍を繰り返す、正常な人物としてそこに存在していた。

とすれば、この少女とその姿を捉えた写真には、次のよ



そうした事の恐ろしさこそが、この惨劇の中でただ一人、人間的であり得た少女を中心として写し出されていたのかもしれないのだ。

うな位置づけが可能だろう。「この少女は、被爆のショックで正常な人間性を解除されてしまった人々の中、正常な人間の在りようを保つことの出来た唯一の人間だった」と。「この少女が不自然に見えるという事こそが、実は最も異常な事態だったのだ」と。

アウシュビッツにおいてさえ、フランクフルトによれば、人々がアパシーに陥るのに数日を要した。一方、この写真の人々が写されたのは、原爆投下のおよそ二時間半後である。戦時下ではあっても、日常を普通の人間性で過ごしていた人々が、たった二時間半でアパシーに陥ったのだ。その中で正常な人間性を保つには、焼け死んだ弟を抱きかかえながら絶叫し、空しい跳躍を繰り返さなければならなかった。核兵器は恐ろしい。その熱線も、爆風も、放射線も。それらはいずれも、一瞬であまたの人々の命を奪い、あらゆるものを破壊する。しかし核兵器が破壊するのはそれだけではない。それは正常な人間から、その人間性をも一瞬のうち奪うのだ。そうしたことを、我々は決して忘れてはならない。

最後に、ふと気づいたことを言っておきたい。世界で最初に被爆者とその惨状を写したこの写真は、二枚目との間

連から、カメラマンの関心の中心が警察官とそれを取り巻く人々であったとの印象を与える。しかし、その人々は右に偏りすぎている。彼らをメインで写したいのであれば、レンズはもつと右を向いている必要がある。

もしかしらこの写真を撮影した松重美人氏は、手にしたカメラをこの少女に向けていたのではなかったか。松重氏は爆心地から2・7キロ離れた自宅の便所で被爆したため、熱線も爆風も免れた。ほぼ無傷の状態で、この写真の手前側から奥の方に向かおうとしていた。つまり、写真に写る被爆者とは、その行動もマインドも逆方向だったと言える。

そうした状況にあった報道カメラマンが、眼前の光景の中で最もやかましく、最も奇怪で、最も躍動的な人物から関心を逸らした写真を撮ろうとするのだろうか。むしろ、そうした人物をこそ撮ろうとするのではないだろうか。

この時の松重氏が、今僕がここで述べたようなことを念頭に置いていたはずはない。しかし、もし彼がその腰に提げていたカメラのレンズをこの少女に向けていたのだとすれば、世界で最初に被爆者を写したこの写真がとらえたものが何だったのか、我々はいまだ一度問い直す必要がある。それは、熱線の残忍さでも、爆風の無慈悲さでもなかったのかもしれない。一瞬にして奪われてしまった人間性、



山家衛良

やまが えごん
長野県上田市出身在住。生業は予備校講師(国語科)。三兄の父。夢想神伝流居合道五段。2016年、信州真田郷の山家神社にて衛士(宮を護るサムライ)を拜命。こちらを本業とし、同神社主催の居合道道場「山家神社水明館道場」の師範も兼務。あだ名は「赤鬼」「鬼軍曹」など、やたらと「鬼」を付けられる。

受賞の言葉

山家衛良

この度はエッセイ賞の優秀賞を頂き、真に嬉しく思います。小学生の頃に漫画「はだしのゲン」を読んで以来、原爆は常に僕の中にあったテーマでした。人間が生み出してしまったあの惨劇がいかなるものだったのか、そのリアリティを追求する中で、御幸橋西詰の写真と、そこに写る一人の少女に出会いました。今回受賞した作品が、あの少女と、彼女が抱えていた幼い弟へのわずかばかりの供養になっただけならば幸いです。



枕飯

高橋恵里花

皆が俯き、淀みないお経を聞いている間、私はある一点をじいっと見つめていた。これでもかというほど盛られた白ご飯に突き立てられた箸。遺影のそばで、それは異様な存在感を放っていた。

後から知ったことだが、あれは枕飯というらしい。この世に別れを告げて旅立つ死者への作法であり、故人がこの世で最後の食事という意味合いがあるそうだ。しかし私には全く美味しそうに見えなかった。というのも、いつから祭壇に置かれていくかも定かでない山盛りの白ご飯は、冷え切ってかびかびとして見えたからだ。あんなものが最後の晩餐だなんて、と少し祖母を可哀想に思った。同時に、そもそも茶碗一杯大盛りの白ご飯を祖母が食べ切れるわけがないとも思った。

祖母は末期の膵臓癌だった。わかった頃にはもう手の施しようがなく、余生を豊かに過ごすという選択肢くらいしか残されていなかった。一度、祖母が手術を受けたことがある。私を含めた家族はもちろんのこと、祖母自身でさえ治ると信じて疑わなかった。だが、予定より早く祖母は手

術室から出てきた。祖母に残された時間は限りなく短いだということ、この時初めて痛感した。麻酔から覚めた祖母は家に帰りがたがった。早く家族のもとで過ごしたいのだと言っていた。

半ば強引に退院させてもらい、自宅療養を始めた。痛み止めを飲み、食前には必ずインスリンを打っていた。以前より少しばかり薄くなった腹に注射針を刺す姿は痛々しかったが、そのあとは何事もなかったように食卓を囲んだ。私が作ったパウンドケーキを切り分けて一緒に食べたこともあった。祖母が買ってきたお菓子を二人でこっそり食べたりもした。家族に見つかると思わず怒られた。血糖値を上げさせるなど毎回決まって言われた。糖尿病を併発していた祖母にとって、確かに甘いおやつは毒でしかなかったかもしれない。だとしても、「とつても美味しいね」と笑う祖母を前にして、その手から食べ物を取り上げることができなかった。

数カ月もすると状況は変わった。祖母の食がどんどん細くなっていった。食べる量も減り、活力も湧かなくなつて、次の日も、その次の日も、祖母はご飯を残した。全く箸をつけなかった日もあった。それでも、炊く米の量を減らすことはしなかった。祖母の分を抜いてご飯を炊いてしまつたら、二度と戻れなくなるのではないかと感じたからだ。わずかでも希望を残しておきたかった。また一緒に温かいご飯を食べられる日が来ると信じていた。

しかし、結局その日は来なかった。食べ切れなかったボウルの中の白ご飯が増えていく一方で、祖母の身体は急激に痩せていった。日に日に目もかつての輝きを失い、虚ろになっていった。台所に置かれたままの冷やご飯が、まるで祖母の体温を写しているかのようで私は怖くなってしまった。本来抱くはずがない恐怖心から、私は祖母を避け始めた。細すぎる身体や冷たくなってしまったご飯を見たくなくて逃げた。

そして、祖母と過ごす最後の日を迎えた。奇しくもその日は、私が夕飯を作った日だった。その頃にはすでに祖母は何も食べなくなっていた。冷蔵庫にはいかに栄養食品というようなヨーグルトばかりが入れられていたのを覚えている。

秋が深まり、冷え込んだ日だった。私は鍋焼きうどんを作った。卓上コンロの上で鍋を煮立たせていると、いつの間にか祖母が背後に来ていた。気配がこれっぽっちも感じられなかったことに吃驚してしまつたが、努めて平常心を

寝室に籠りがちになった。まれに寝室の外に出ていたらしいが、日中は家を離れていることも多く、私は祖母の姿を見なくなった。

久々に祖母を見かけたときは驚いた。私の知っている祖母の姿ではなかった。パーマが印象的だった髪はべたつとして、かつてふつくとハリのあった頬はこけ、その下の骨が浮き出て見えた。対面して夕ご飯を食べる際は、どこに目を遣つたらいいのかわからなかった。私は得意の軽口を叩く気にもなれず、料理が並べられるのを待っている間、じっと黙るしかなかった。

祖母用の茶碗には、健康な頃の半分の量のご飯しか盛られなかった。聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声で、いただきますと唱えてから祖母は箸を持った。他のおかずには目もくれず、白いご飯だけを一口、二口と食べていた。そしてすぐに、お腹いっぱいだと行って箸を置いた。そのまま寝室に消えていった祖母とは対照的に、食卓には食べかけの白ご飯が残されていた。後でお腹がすいてしまうかもしれないねと、ラップをしてそのまま置いていたが、祖母がそれを食べることはなかった。翌日、気になって私は食べかけのご飯を見に行った。水滴がついたラップを剥がすと、ご飯はすでに冷め切っていた。表面はばさばさし始めていて、電子レンジでチンしてももう食べられないだろうと思った。

装った。何も言わずにいると、祖母はそのまま椅子に座った。自分から食卓につくなんて珍しいことだと思ひながら、うどんと小さく切っておいた人参やごぼうをよそってあげた。湯気の立つ皿を見ながら、

「これは自分で作ったの」
と祖母が問いかけてきた。私はなんだか照れくさくなつて小声で答えると、祖母は少しだけ笑ってからゆつくりと食べ始めた。私は自分のうどんが冷めてしまうことも忘れて、祖母の食べる様子を見ていた。目が離せなかった。祖母が温かいご飯を食べている。自分の意思で箸を動かし、食べている。祖母は、生きている。気づけば私は泣いていた。私がぐずぐず音を立て始めると、祖母も私が泣いているとわかった。祖母はどうして私が泣いているのかわからないながらも、泣き止ませようとしてくれた。

「泣かないで。とても美味しいから、泣かないで」
と何度も祖母は言ってくれた。それでも私は流れる涙を止めることができなかった。私は泣きながらうどんを啜るしかなかった。ごちそうさま、と祖母が言って去ってから、私はずっと泣いていた。

それ以来、祖母の姿を見ることはなかった。鍋焼きうどんを共に食べた日が嘘だったように、翌日にはもう祖母は起き上がることさえできなくなり、ついに病院に連れて行かれた。祖母が病院から自宅に再び戻ってくることはな

さが示していた。その事実には直面して、私は祖母の訃報を聞いてから初めて泣いた。私の手のひらよりも遥かに低い温度を感じながら泣いた。祖母の棺から離れても涙は止まらなかった。

祖母の出棺のとき、がしゃんと何か割れる音が聞こえた。音の鳴る方へ目を向けると、雨が染みたコンクリートの上に、割れてバラバラになってしまった祖母の茶碗があった。接着剤を用いてももう直すことはできないくらいに飛び散っていた。もとは祖母が愛用していた茶碗だった破片を見ながら、また涙が溢れてきた。

葬式を終え、食事が開かれた。座敷に上がり、祖母の遺影が置かれているのを見つけた。祖母に見下ろされる形で畳に座ると、次から次へと料理が運ばれてきた。料理を目の前にして腹が鳴った。こんな時でも空腹を感じる自分を卑しくも思った。

全ての料理が配膳された後、最後にお櫃入りの白ご飯が運ばれてきた。漆塗りのお櫃の蓋が外されると、ぼわあつと白い湯気が立ち上った。私のお盆に置かれた茶碗からもまだ湯気が確認できるほど温かかった。箸を取り、白ご飯を口に入れた。美味しかった。喪に服すべきなのに、ご飯をばくばく食べるのは不謹慎な気もしたが、泣き疲れた身体は白ご飯を欲していた。ふと顔を上げると、遺影の中の祖母と目が合った。一緒に食事をしているときに見た微笑み

かった。

入院から一週間も経たずして、祖母が亡くなったと伝えられた。私は泣き叫ぶこともせず、淡々と日常を過ごした。薄情だと言われるかもしれないが、私はどこかで祖母の死を予感していたのだと思う。祖母の纏う死の気配が色濃くなっていることに、寝室の外から気づいていた。

祖母の遺影には元氣だった頃の写真が選ばれた。祭壇に飾られた山盛りの冷たい白ご飯は、そんな祖母とは不釣り合いだった。私はそれに気を引かれた。どこかで見た覚えがあったからだ。そして気づいた。あれは、祖母が食べ切れなくて残り、翌日冷たくかびかびになってしまった白ご飯だった。

出棺の直前、葬式屋が最後のお別れをするように言った。家族が代わり番こで声をかけながら祖母の頬を撫でた。この時、初めて祖母の遺体を見た。言葉通りの骨と皮だけになってしまった祖母の姿にぎよつとした。恐る恐る頬に手を伸ばしてみると、思ったよりもひやつとしていてすぐに手を引いた。滑らかな皮膚の感触とガラスのような冷たさが結び付かなくてわけがわからなかった。もう一度手を伸ばした。先程同様、熱を感じることはできなかった。私は祖母が死んだのだと理解した。祖母の身体の冷たさが私に死を教えた。今にも起きてしまうのではないかという表情とは裏腹に、もう二度と目を開けることはない温度のな

を携えていた。いっぱい食べなさい、と祖母から言われている気がして、また食べた。温かいご飯はとても美味しかった。



高橋恵里花

たかはし えりか
1999年、山形県山形市に生まれる。
2018年、高校卒業後に進学のため上京する。現在は青山学院大学文学部に在学中。

受賞の言葉

高橋恵里花

この度は第14回文芸思潮エッセイ賞にて優秀賞に選出されたこと、誠に有難うございます。

この作品は、今は亡き祖母の記憶を綴ったものです。大好きな祖母の声をもう思い出せなくなってしまっていることが悲しくて、これ以上忘れたくなくて書き記しました。ちよつとした備忘録であるかもしれませんが。そんな作品を評価していただき大変嬉しく思います。

今後より一層の創作活動に励んで参ります。改めて、御礼申し上げます。

港の時代

人間六度



高校生の僕は何か劇的なことを望んでいた。それが自分の身に起こるのか、それとも社会に起こるのか、なんでも良かった。とにかく非凡な人生を歩みたかった。

十九の秋、白血病になる。浪人中。まるで悲劇のヒーローだ。おそらく、少し闘病を楽しんだ。念願の移植治療をした。病気に勝ったという勲章を手にし、もとの生活に凱旋できると思った。

そして奇跡が起こる。ただ悪い方のやつだった。移植するとGVHDという副作用が起こる可能性は聞かされていた。ただそれは、ジェットコースターから万が一落ちたら命を落とすというような文言と同じだった。

僕はジェットコースターから落ちた。しかもえらく変な落ち方をした。食事する能力を失ったのだ。世界でも前例が二件しかないレアケースだったらしい、という情報は病院食に塩をふるくらいの慰めにはなった。医者にも原因がわからないという事実は、僕の医学に対する敬意をゼロにかえた。

長い絶食期間は味覚もダメにしていた。それでも治療を続けなきゃならない。

栄養はもっぱら鎖骨の少し下に開けた穴から中心静脈へ流した。少量の液体を飲むことだけは許された。少なくとも医者は許した。でも味のついた液体はまずくて一切口にできない。味覚障害はあらゆる甘さを不快感に変える。僕は一切味がしないものを求めた。そんなものは世界に水と炭酸水しかなかった。

口の中でなめくじを飼っているようにいつも不快だった。僕は舌苔にまみれたどろどろの液体を吐き出すだけの蛇口だった。

首に刺したチューブから抗がん剤をうっていた頃が懐かしい。体と病気を一緒に壊すのだ。いわゆる「俺ごと撃て！」ってやつ。キヤスターのついた五本足の点滴台は、どんなところへも一緒に付いてきた。常に置き場所に困るが、まだ人生に張り合いがあった。

医者は病状が悪化していないことにひどく喜んだ。唯一快方のみを求める僕は、医者の笑顔を憎んだ。医者は命を

助けるだけで人を助けられると思っっている。浅見。少しずつ軽くなる体。身長一七〇センチが三二キロを割る。

二年経つ。僕は三重大大学病院にいた。そこで日本でいちばん熟達した執刀医たちに会った。気さくな男たちだった。久々に相手を睨まずに医者と話せた。そして彼らは、白血病に侵されて腐った大腸を切る決意をした、日本で唯一の医者たちだった。

原病が白血病ともなれば、手術後の出血の心配や、合併症の恐れがあまりに大きすぎて、それまで誰も手術に踏み切れずにいた。そんな中で彼らは未聞の手術をやったのけた。僕が全身麻酔で夢を見ない眠りにしている間に。そして僕は『人工肛門敷設者(オストメイト)』になった。

二年ぶりに食べた最初の固形物は、雪印カマンベールチーズのカットタイプだった。味覚障害があっても、チーズのシンプルな塩気は美味しかった。顎を動かす方法も忘れていたので、舌で潰すように味わって食べた。

裸になって視線を落とすと、へそより少し左下の位置に梅干しのようなピンク色の塊がくっついてるのが見える。ストーマと言う。それは切断した小腸の継ぎ目だった。筋肉も皮膚もない、むき出しの臓器の切れ端が下っ腹から出ている。

そこから絶え間なく黄色く、時として茶色い液体が漏れ続けるのだ。それは便だった。

便意は感じない。代わりにお腹が液状の便を吐き出し続けるようになった。自分の意思では止められないので、お腹に袋を貼り付けるのだ。以後、油の混じった水と咀嚼された食物の原型が混じり合ったものを便と呼ぶことを余儀なくされた。

余談だが、大型個室の公衆トイレで腰あたりの高さに、横長な便器が壁に張り付いているのを見たことはないだろうか。オストメイト用のトイレだ。立ったままお腹の袋を開けて溜まった便液を流し出せるように、腰ほどの高さに設置してあるというわけだ。

お腹に袋がついているというだけで生活は俄然むずかしくなる。

入浴は、カビの生えたパンを処理するような、望まない生活行為になった。袋が破裂して便を撒き散らす恐怖は何をしている時でも、寝ている時でもつきまとった。しかし食べられるようになったことが何にも代え難い幸せだった。味覚も半年立つ頃には戻っていた。食事能力と味覚さえ取り戻せば、あとは体のどのパーツがなくなってもよかった。大腸を失うと聞くと、怖い。体のけっこうな容積を占める臓器だ。でも三重大の消化器外科で権威の医師が言うには「大腸なんて港区みたいなもんだから」港区は名古屋市の



の中ではもっとも地価が安い土地。それほどに重要ではない器官だと言う。そんなアホな。

生きることに、というのは地雷だ。医者によくこの詭弁を使う。彼らは命しか助けられない。命と命以外の全てを天秤にかけたら、命を取る狂気の連中。三重大に来るまで

んだ。三重大は通常食を常時七種類から、無菌食であつても五種類から選ぶことができる。通常食には『寿司』というカテゴリさえある。そのうえ、海も見渡せて景色がいい。ちよつと高級なビーチサイドホテルのようだ。さらに最上階にはどう考えても院内にあるべきではないオイリーな中華料理屋がある。しかしそれもいい。入院患者が一番食べたいものと言えば、塩辛く脂っこいものと決まっているのだ。

そこに食べにくる人間たち、僕も含めて、それは長い間食べることや飲むことができず花のように生きてきたことで、命を忘れかけた人たちだ。中華は、ひと口食べると生きていくことを思い出す。消化のために消化して得られる以上の体力を使おうと、クロン病が悪化しようとして、患者には定期的に人間だったことを思い出す儀式が必要なんだ。中華料理は適している。それに気休めのようなだが、点心はさっぱり系のご飯と言えなくもない。

初夏、最後の手術が終わった頃、僕は二二歳になっていた。これからどうしよう。冷房の効いた部屋で海外ドラマを見ながらしばらく考えた。周りの人たちは今ごろ夏休みか。いや、もう就職活動がどうか言っているから、休みなんてないのかもしれない。同じ病棟にいた同年代の友達、理学療法士を目指すらしい。

はそう思っていた。でも選択肢なんてなかった。食べられないということ、想像を絶する絶望を人生に与える。

結局、食べられるようになったという結果が嬉しすぎたのだ。百年ぶりに降る雨にうたれるなら風邪をひくぐらい許せちゃう。オストメイトになることぐらい許せちゃう。

食事することは自分の肉体を再生する最良の手段で、人生を前進するための養を振ること。二年ぶりに飯を食う僕は、この世の誰よりも食事を愛し、尊び、その偉大さを感じていた。「いただきます」と「馳走様でした」はマントラになった。マクドナルドでも誰に向けてか知らぬがとりあえずその二言は言う。料理人、生産者、食物を生み出した大地、のみならず大地を作り出したプレートテクトニクス、プレートテクトニクスを教えてくれた理科の先生、その先生を産んだ祖先の人類、人類誕生のきっかけとなった太古のよくわからない出来事、そのあたりまで愛せる。

人工肛門を閉じオストメイトを卒業する。

三重大大学病院のヘビュユーザーとなった僕だが、もし病院のレビューを書くなら、星4・5はつけるといふほどにいい病院だ。

まず飯がうまいんだ。母親は看護師の方言が可愛いとかな言っていたが、病院食が美味しいことが他の何より重要なだけでありがとうと涙ながらに言う。僕は障害児の身になってみる。そんなこと言って欲しくないのに、と涙が流れる。次に母親の身になってみる。そう言うしかないんだよ、とやはり涙が流れる。

家にいると相変わらず両親が「生きているだけでありがたい」という目で僕を見る。それだけで生を赦されていると思う自分も確かにいる。そんな人生もありかもしれない。白血病闘病期のことだ。看護師は、僕の病状があまりにひどいので個室を優先的に使わせた。本当は一九時までの面会時間も、二二時まで伸ばしてくれた。僕はそこまでのことをされていても感謝どころか、もつと多くの奉仕を求めた。

憐れみという気持ちを逆手にとって、病室という城で健常者たちを顎で使う王だった。

それは良くなってからも続いた。

ある夜、母親にケンタッキークッキーのセットAを頼んだはずなのにセットBを買ってきたことに激怒した。違うなんてバズかツイスターかくらいだ。それでも、僕の食に対する意識を軽視していると怒鳴った。僕が怒りをあらわにする和家人はみんなひれ伏した。

まるで畏れられる神だった。これはなにかが間違っているのだともう気付いている。

体が健康になるたびに、僕は弱者の特権を剥奪されていくのがわかるんだ。少しずつ僕は、王座の階段を降りていく。人に助けを求めることが、『妥当』から『引け目』に変わっていく。それが治るってことらしい。

僕の精神は港に停泊していたんだ。腕に繋がっていたチューブは、停泊用のロープだった。腕を見ると、自由に動いた。点滴台が動きを阻むこともなかった。それだけが確かに今、わかることだった。



人間六度

にんげん ろくど

- 1995 愛知県名古屋市長
- 2013 急性リンパ性白血病罹患
- 2014 文芸社より書籍「BAMBOO GIRL」を自費出版
- 2018 寛解のち、日本大学芸術学部文芸学科へ進学
- 著作に、「クジラ委員」江古田文学 98 掲載

受賞の言葉

人間六度

人間六度というPNは、自費出版するさいにつけた。当時、抗がん剤の影響で体温はいつも三十七度超で、六度の平熱は、健康の言い換えだった。

病気が落ち着き、進学した大学で僕は木曜会というサークルを立ち上げた。志を同じくする者で集まり、批評し合う場だ。この作品は、サークルの合宿で生まれた。

僕は多分、書かなければ生きられなかった。自費出版や日芸進学もその助けになった。夢が命をどうしようもなく繋いだ。

僕は港を発ってまもない。受賞の希望が、まだ暗く長い航路を照らしてくれると信じる。



1512円 (税込/送料共)
御注文はアジア文化社まで

新刊

文豪の死には、作品を越えて人生に深く問いかけるものがある。文豪が残した最後の言葉——それは生きることの深さとその意味を投げかけてくる。文豪の赤裸々な魂に触れる貴重な遺言集。

文豪の遺言

木内是壽



- 坪内逍遙 尾崎紅葉 樋口一葉 森鷗外 田山花袋 泉鏡花
 国木田独步 夏目漱石 島崎藤村 芥川龍之介 永井荷風
 谷崎潤一郎 志賀直哉 有島武郎 武者小路実篤 菊池寛
 宮沢賢治 川端康成 小林多喜二 大佛次郎 岡本かの子
 吉川英治 太宰治 井上靖 三島由紀夫 松本清張 遠藤周作
 吉行淳之介 司馬遼太郎 寺山修司 向田邦子 中上健次 他

アジア文化社

1728円 (税込) 送料サービス

2017.9.1 出版
御注文は裏面を御覧ください

171 作家の遺言は、死に臨んで純粹に自己と向き合い、飾り気のない一人の人間として自己の意志を発露している。それは作家自身の素顔に迫るもので、死にざまは生きざまに通じる。

少年

飯島もとめ

広い道路を左に折れ、歯科医に向かう通りを曲がろうとしたとき、真っ直ぐに延びた広い道路の百メートルほど先に、リヤカーを引く少年たちの姿が見えた。近くのS農業高校の生徒たちであることがすぐ分かった。

S農業高校は、この住宅地から西へ一・五キロの地であり、温室も大きな造りのものが二棟もあり、広い学区域を持つていた。生徒たちは、自分らで育てた花、果物、野菜など、それらの稔りの時季にリヤカーに積んで近くの住宅地に売りに来る。新鮮であり、幾分安いので三三五五と人は集って来る。総合病院の玄関近くでこの少年たちを見たこともあった。

「ちよっと、ちよっと」

立ち止まったわたしは声をあげ、手招きした。それを見た四人の少年はこっちへ向いて近づいて来る。声をあげるでもなく走るでもなくわたしの前に立つと四人揃ってわずかに体を前に倒した。リヤカーには浅い木箱に並べたシクラメンの鉢がピンクと白の花房を盛りあげて、十個ほど

あった。

「あ、お正月用の花ね。昨日も今日も暖かい小春日和でお正月を忘れていたわ。でも、シクラメンでぐっと目の前にお正月がきたみたい」

そう言って見た少年たちの表情は少しくずれ、しっかりこっちを見ている。

「わたし一鉢いただくわ。だけど困ったな、これから歯医者へいかなきゃならないの。どうしよう。予約の時間なの」と言いながら四人の少年たちを見ていたが急に思いついて明るい声をあげた。

「そうだ、わたしの家へ寄ってって。家にはとても花好きのおばちゃんがいるんだから」

ほっとしたような四人がわたしをじっと見ている。

わたしは数軒先の家を教えた。左側の赤い屋根の二階建て、と詳しく説明した。

「わたし、歯医者がすぐすむから、ちよっとおくれるけどね、家に寄ってって」

並べられた中から一鉢を取り出すとわたしは自分の顔に近づけた。

「こっちの方がいいかな。いやこれか」

花選びに手間どる、という計算があったのだ。

「この鉢かなあ。いやこのピンクの盛りあがりの方がいいな」

腰を折って花に顔を近づけてわたしは歌うような調子になっていた。

「白もいい。ピンクもいい。お花の御殿だねえ。ああいい匂い」

花の匂いと頬にふれるかすかな感触に酔いながら、わたしは花の隙間から少年たちの顔を盗み見していた。相手に感づかれないように手ぶり身ぶりよろしく花を見ていた。いや花を見る様子を演じていたのだ。

額のあたりから頬にかけての線は、一人前の男性になりきっていない丸さがあった。きよろきよろ動く目の色にもまだ子どもがいる。ちよろり、ちよろり、と盗み見たあれこれをつなぎ合わせても、土いじりで日焼の色が消えない顔には、いずれもまだ人を頼らねばという子ども色が充ちている。

わたしの少年たちへの思いは急に大きくふくれあがった。そしてパチンと弾いたのである。それが思ってもいなかった行動を引き出した。ためらいもあったがそれを

「さて、どの鉢をいただくかな」
リヤカーにのめりこむようにしてわたしは花鉢に顔を近づけた。
「これか、いやこっちの鉢がいいかな」

リヤカーの四人が歩き始めたので、わたしは左に曲がって歯科医への道を急いだ。
予約の時間ぎりぎりだったが医者は事情を知っているかのように、歯の具合を見るだけで終わった。
走るようにして家に戻ると、大通りを左に折れたそこにリヤカーを止めて四人がいた。
「花を買ってくれるって言われたからと、チャイムを鳴らすのよ」

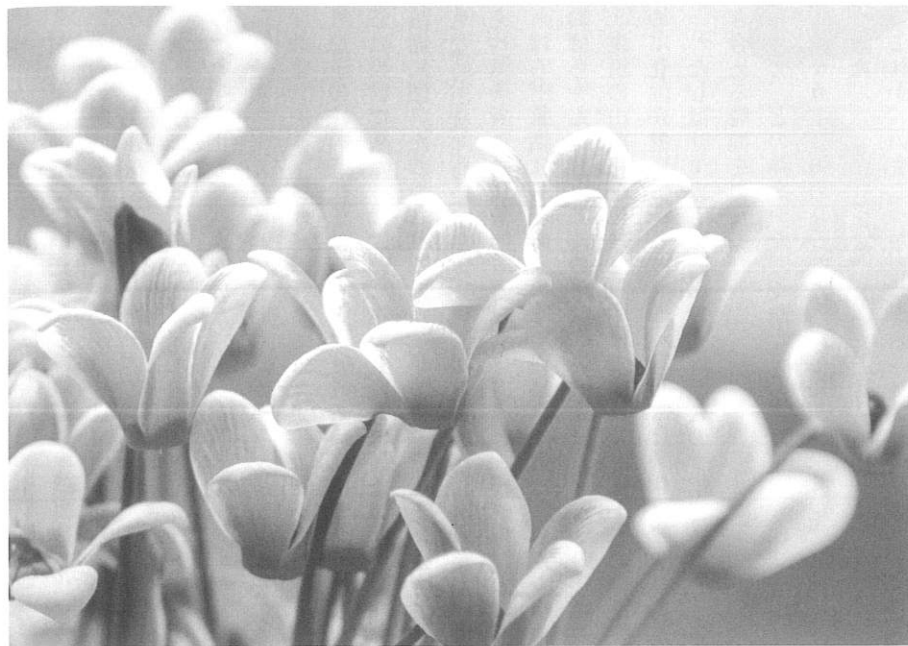
息子の嫁の三代子は、ちらつとうらめしそうな目をわたしに投げて来た。ははん、本でも読んでいたのか、と嫁の波面に頷いたわたしは四人との事情を一言伝えたが、答えもなく三代子は家の中へ入ってしまった。このことがかえってチャンスになろうとは。

「ほら、玄関にも花鉢がいくつかあるでしょ。みんな今のおばちゃんが育ててんのよ」

生垣の山茶花を抜けた玄関までのコンクリートの幅を狭めて花鉢が置いてある。

わたしはリヤカーを開んで立つ四人の少年とゆっくり向き合える時間を得たのだった。

「さて、どの鉢をいただくかな」
リヤカーにのめりこむようにしてわたしは花鉢に顔を近づけた。
「これか、いやこっちの鉢がいいかな」



越えて動いてしまった。

リヤカーの回りに立っている少年。自分に一番近い少年の、両脇にだらんと垂れているその両手をわたしの手がしっかりと包みこんだ。一秒か、いやほんのいつとき。しかしその突然のわたしの手は跳ねかえされなかった。それで勢いが出たのか、わたしの両手は、二人め、三人め、四人めと、同じように残りの少年の両手を包みこんだ。四人めの子の目は、わたしの手を待っている光があった。わたしはその光を見逃さなかった。少し冷たく、以外に固い、いとしい手。

一鉢を買い、代金を支払うと、少年たちはリヤカーを引いて去っていった。わたしは一段高い玄関先に立って少年たちを見送っていたが、家のある角を曲がるとその影は消えた。

ふっとわれに返ったわたしは、胸の前に両手の平を並べてじっと見入った。ほんのいつとき前、四人の少年の手を握ったわたしの手を見た。四人の少年の顔がそこに浮き上がってくる。四人の少年の両手をしっかりと握りしめた手である。思ってもいなかった行動だった。

「ありがとうございます」

四人の揃った声が耳元で鳴る。……

「誰も、この手を拒否しなかった。この老いの手を拒まなかった」

低い一声をこぼし皺の手をじっと見る。

足元に置いたシクラメンの鉢を持って家の中に入った。

下駄箱の上に置こうと思ったが、ガラスの白い花瓶に黄色い小菊が三輪、枯枝に寄りかかるようにして挿してある。冬枯れの風情ありだ。

「三代子さんの花への思いの深さか」

一声呟いて、わたしはシクラメンの鉢を客間の床の間にそっと置いた。

「いいじゃないかあ。ありがとうございますよ、おにいちちゃんたち」
わたしは拳手の礼をして客間を出た。充たされた思いになっていた。

夕餉^{ゆうげ}の仕度を始めた三代子を尻目に、わたしは庭に出て濡縁に腰を下ろした。小春日和だった一日も終わりに近く夕焼けの色がいつぱいに広がっている大空を見た。そこにリヤカーを引いている四人の少年を描いて見ていると、

ゲーン、ゴーン、ガン

突然にチャイムが鳴ってびびくりした。チャイムと言うより鐘と言った方がいい、大きな音が夕空にぶつかって散り消えていった。S農業高校の下校を促すチャイムだろう。何十年も住みながら初めて聞く音。途端に濃くなってきた闇色の空に、いくつもの少年たちの姿が影絵になって見えてきた。明るい声をとばし散らしながら少年たちの影は消えていく。



近影／紙芝居を演じる飯島さん



飯島もとめ

いじま もとめ

- 1941 県内文学作品コンクール1位
- 2009 藤村文学賞
ひまわりっ子手作り紙芝居、最優秀賞
- 2012 銀華文学賞奨励賞
- 2016 文芸思潮賞優秀賞
- 2018 文芸思潮エッセイ賞奨励賞

受賞の言葉

飯島もとめ

なんとなく不安を抱きながら、授賞のおこぼを噛みしめました。わたくしの、小さな体験を受け容れて下さいまして、ありがとうございます。家の庭から見える遠い山の端に虹を見たような気がいたしました。老い萎えまして、ペンを持った六十年という歳月をしみじみと振りかえりました。が、まだ、ペンを捨てる気にならないのでございます。心からお礼を申しあげます。

癌紀元後の世界

松岡久仁子

Essay

余命宣告というのがあって、癌になると「あと何年生きられるか」が重要な話題になる。「あと何年の命と言われたがこのくらい生きられた」「手術しなければあと何年の命です」という具合に使われる。「あと何年の命」と言われると、実際のところは明日交通事故で死んでしまうかもしれないのに、その余命宣告がずしりと堪える。格闘技で「レバーに来る」という言い方があるけれど、まさに内臓を打たれて息がつけられない感じのショックを受ける。とにかく癌と言われた瞬間から健人ではなく癌人となる。一日一日が貴重な宝石に変わる。未来が見えないから過去を振り返る。「自分」というピッケルを「現在」という氷雪につき刺すように深く刻みこもうと、もがき始める。そして誰もが「藁」にすがり始める。

私たちもそうだった。夫は二〇一〇年にステージⅣのS状結腸癌(多発肝転移)を宣告され、結腸二五センチ、肝臓左葉全部と右葉四カ所を同時に切除する大手術をした。私たちは、こんなに勉強したことがないというくらい、癌とその治療について勉強した。厳格な食事療法を始め、身体によくな

ツイッコさんとは、私の癌ブログで知り合った。私が主人の食事療法で試行錯誤しているとき、「自分も厳格な食事療法で良い状態を保っている」というメッセージをもらったのがきっかけだ。ご主人がルーマニア人で、蜂蜜やハーブを使った断食を含む厳格な食事療法を行っていた。それが功を奏し、ツイッコさんは歩けるようになり、仕事にも復帰した。

ただ、ツイッコ家には問題があった。ご主人のツイッコさんが、日本語が不得意で身体も弱く、日本での就労が難しかった。ツイッコさんは何とか家計を向上させたいと願い、勉強をして資格を取り、転職。二時間かけて通勤するようになる。次第にツイッコさんの生活はストレスフルで「親癌的」なものになっていく。慢性的睡眠不足、夫婦喧嘩、ファストフード、お酒、煙草。でもツイッコさんは肩をすくめて言った。

「シカタアリマセン」
ツイッコさんとツイッコさんのご夫婦に接して一番驚いたのはここだ。夫婦で意見が違っていても、相手の選択を尊重する。私たちは当時バリバリに厳格な癌の修行者だったから、身体に悪いとわかっていのになぜ「してしまおう」あるいは「やめられない」のか、それをなぜ放置しておくのか、本当に不思議だった。

そのうち、ツイッコさんの病態は悪化し、骨転移(原

いと言われるものは排除し、よいと言われるものを摂取した。それでもその後、二〇一四年に膵臓、二〇一五年には肺に転移し、二度手術をする。正確には、膵頭十二指腸切除手術の三カ月後に行った再建手術も入れれば、三度になる。

しかし私はこんなありふれた情報を書きたいわけではない。何度もの手術や、辛い抗癌剤や放射線治療、高度で高額な最先端治療、ストイックな修行にも似た代替療法、そして定期的な検査。微動する腫瘍マーカーの数値に怯え、CTの画像を食い入るように見る。それらは癌人にとって、ごく当たり前の風景である。「癌ではない人達」には不具合や痛みは想像し難いから、癌体験が奇談怪談のように伝わる。私がここで書きたいのは癌人のそういう日常生活ではない。治療や不具合、それはどの病気にもあることで、どんなに詳細に説明しても体験そのものには届かない。見世物小屋のレポートになってしまふ。癌だと不幸だ。癌ではないから幸せだ。そんなことはありえない。そうではなく、私が書きたいのは、癌紀元後の「世界」のことだ。

ツイッコさんのことを書かなくてはならない。ツイッコさんは乳癌として、骨折。貧血で動けなくなり入院する。その時ツイッコさんは私たちに、見舞いに来ないように、とメールしてきた。

「癌患者が癌患者を見舞うって、マジでシャレにならないから」でも実際にはその後、私たちは二度、お見舞いに行った。一度目はツイッコさんから要請があり、ご自宅に会いに行った。ツイッコさんとお嬢さんのことを考えて、ご自身の財務状況を整理するためだ。二度目はお嬢さんから危篤を伝えられ、病院に会いに行った。ツイッコさんの意識はもうこちら側にはなく、目は開いていても遠くを見つめ、私たちではない誰かに語り、時々小さなうめき声を上げていた。

……輸血をしたので、危機は脱しました。でもそれは彼女の苦しみを長引かせただけです。医者は言います。「輸血の治療承諾書に」サインしてください」と。私にどうすることができたでしょう?……

という内容のことを御主人のツイッコさんは、たどたどしく怒りを込めて語った。そして黙ってツイッコさんの枕についている髪の毛や糸くずを注意深く払い清めた。ツイッコさんの顔が、整えられた枕の四角いフレームの中に、ぽっかりと美しく浮かび上がった。

ツイッコさんはなぜ、途中で「諦めた」のだろうか? せっかくなまぐさいっていた「治療」だったのに、なぜ?

私たちは不思議だった。でもすぐに思い知ることになる。夫が癌になったとき、医師は「これは最優先事項です」と言った。進行していることすべてを中止し、家族の意識は癌に集中した。親戚の意識も集中した。この危機を脱することができないのなら何をしてもいいと、心から思う。できることはないかと探し、実行する。

「できること」にはお金がかかる。すべての治療にはお金がかかる。代替療法であっても同様だ。食事療法は安価だろうか？ とんでもない、大量の有機野菜、水、調味料から調理器具まで揃えなければならない。おまけに、病人は手術や治療で仕事を休む。そして術後の体は、しばらくは使い物にならない。支出は増え収入は減る。

それでも癌保険や貯金、親戚や会社の援助などで、二年間は持ちこたえられる。その二年で、選択した治療方法に集中的に資本を投下する。

しかし癌紀元後三年目を過ぎる辺りになると、資金が枯渇してくる。ただし、「私はこれで生還した」という癌ビジネスを構築したり、すでに資産を築いている場合は、例外だ。豊かに治療を「消費」することができる。

「治療」とは「消費」なのだ。
癌治療は登山と似ている。私たちは癌になると寛解（頂上）を求めて山を登り始める。登山は過酷だが、地図（医師）も登山計画（治療計画）も希望に満ちている。途中で

因について考え、治療的な生活に変えた。それはこれまでの生活とは、大いにずれている。治療に費やし、過去を思い、現在に固執する生き方は、周囲の時間の流れともずれている。私たちには世界が二重に見えるようになる。

山頂に立つと、こうした感受性に孤独を感じ、もうそろそろ下山したいと思う。余命のカウントダウンは止めだ。もう一度一から人生をカウントアップしていくのだ。減るものではなく、増えるものを数えよう。夫はまたフルに働き始めた。

夜帰宅すると、先に寝ている夫が玄関に揃えてくれた私のスリッパがある。毎晩後に寝る方が先に寝た者の手を握る。どれも淡雪のようにささやかな出来事だ。でもそれは「魂の余命」として降り積もっていく。私はそこに色彩を感じる。ツイッコさんが枕の周りを掃き清めて浮かび上がらせたツイッコさんの顔の尊さ、私はそこに意味を感じる。消費の世界が「外側」の出来事なのだとしたら、癌紀元後の「内側」の世界は、心が動き、色彩や温かさを感じる。たぶんそれが「生きる」ということの対価なのだと思う。余命ではない、与命なのだ。癌は老化のカリカチュアでもある。

「これって逃避？ 逃避なのかな？」
ツイッコさんが呟く。
癌を治すことが逃避なのか、癌の治療から目を背けるこ

落石（痛み）や天候不順（体調不良）に遭っても避難小屋で宿泊（緊急入院）できる。整備されたルートで沢山の登山者（患者）と一緒に不安はない。緑の風景（消費の風景）は目に新しく、登山者とも仲良くなる。同時に競争心が湧く。いつかきつと自分は、自分だけは、頂上に辿り着くのだ、と。

次第に緑が低くなり少なくなる。途中で一人減り、二人減りして、残った登山者は慎重になる。次は自分がリタイア組になるかもしれない。黙々と歩き、やがて森林限界に達する。そして辿り着いた山頂の景色は？

何もないただの岩だらけの土地だ。その岩に座って癌人は考える。失われた臓器、費やしたお金と時間と努力。それには何の意味があったのだろうか。癌を治して、健康になって「夢」の実現に向かうことが目的だったのに、この五年は癌を治すために生きていた。「生きる」ということを「治療」に投資していた。そして中途半端な身体と中断されたキャリアだけが残った。その意味は？ 五年生存率、よし、突破した。でもその先は？

ツイッコさんは言っていた。「なんか、もう、癌に飽きちゃったんだよね。変な言い方だけど」

癌を治したとしても、それは「生きる」とは別の軸なのだ。私たちは治療するために生まれてきたわけではない。私たちは癌を生きた五年間で、人生を組み直した。癌の原

とが逃避なのか、それとも癌そのものが逃避だったのか。癌によって扇動された消費の狂騒を経て、私たちは世界の抜け殻に触れた。そして小さな宝石のカケラのような、「生きる」を拾いながら、下山する。癌紀元後八年目の、山の風景を楽しみながら。



松岡久仁子
まつおか くにこ
武蔵野音楽大学大学院修了
了後、ピアノ教師の傍ら演奏活動を続ける
2017年、「DA/LED A」を結成
「わたしのこもりうた」プロジェクトを展開中

受賞の言葉

松岡久仁子

「癌紀元後の世界」は以前受賞した「音楽にすくわれるもの」の続編です。夫が癌になって生き続けている「世界」。癌患者は増え、情報も豊富ですが、それとは違う小さな真実を書きたかったのです。ツイッコさんが文字の上で蘇ったのが、何より嬉しい出来事でした。私に再度ペンを執らせてくれたこの賞と、夫と、夫に命の雫を与えてくれた、「世界の向こう側にあるもの」に感謝いたします。この賞はツイッコさんに捧げます。

ピアノ

武中彩

偶然というにはあまりに不思議な雨だった。引き取りのトラックが来た時、晴れた空から急にポツポツと降り始めた大粒の雨は、トラックを見送り終えた時にはもう止んでいた。

四十数年間大切にしてきた思い出の詰まったピアノを手放そうと決心したのは、ある熟練の調律師さんとの出会いからだ。老舗の楽器店を営み、歳は七十も後半だというその老紳士は、見る見る間にピアノのあちこちを取り外した。そして、隅々のほこりを丁寧に取り除き、弦を磨き、それから何度も鍵盤を叩いては、年齢を感じさせない見事な熟練の技で一つ一つ音を整えていった。

「いいピアノですよ、これは。もちろん大事に使ってこられたのですが、四十年も経ったとは思えないほど、どこも痛んでいない。調律さえすればまだまだ長く弾けますよ。良いピアノに出会いましたね」

決してグレードの高いピアノではないのに、何だか我が子が褒められたようで誇らしかった。これも母のお陰だと思った。そしてその頃から、私の中で、

ところが、年が明けた二月の小雪が舞う寒い日、母は突然の病で五十一の若さでこの世を去った。その日、大学が休みでほんの二、三十分前まで一緒に家について母を見送った私にとって、あまりにも突然の母の死は、言葉では表しえない衝撃だった。

ピアノは母の形見となった。教師になりたかったのに上の学校に行かせてもらえなかった母は、その夢を私に託し、そして永年の憧れでもあったピアノを買ったのだと思う。ようやくその夢に近づいたのに、母は教師になった私の姿を見ることは出来なかった。ピアノが来た時、なぜ母にピアノの弾き方を教えてやらなかったのか。私の心の奥底に鉛の雫のような悔いが残った。

教師になった私はマイピアノで教材曲の練習をした。夜遅くに弱音ペダルを踏みながら遠慮がちにしか弾けなかったけれど、仕事で使うからとピアノを買ってくれた母の思いが心に沁みだ。程なく結婚したが、新居のアパートは狭く、また育児に精一杯で、それから暫くの間ピアノはやむなく実家に置いたままとなった。

五十年代後半で最愛のつれ合いを亡くした父は、その後親戚が持つてくる再婚話も断り、独り身のまま八十八歳で生涯を閉じる。私と妹を嫁に出した後、父は二年ほど一人で暮らしていたのだが、私は長男の小学校入学を機に、以前から夫も同意してくれていた父との同居を始めた。父と、

「このまま我が家に置いておくより、これからピアノを学ぶ若い人に弾いてもらうほうが、このピアノがもつと生きてくる」

これまで思いもしなかったそんな気持ちが湧いてきた。

昭和三十年代、私が子どもの頃、日本はまだ貧しくてピアノはまさに高嶺の花だった。経済的にも住宅事情からも、家にオルガンではなくピアノがあつて習っている子なんて、クラスに一人いるかいないくらいだった。やがて、経済発展と共に日本も次第に豊かになっていったが、便利な生活家電が優先で、ピアノはやはり贅品だった。

昭和五十年暮れ、大学卒業を控え、私が教職に就くことが決まった時、「仕事で使うようになるから」といって、母がピアノを買おうと言いつつ出た。姉が結婚したばかりの上、これからまだ妹の学費も必要で、当時の家計を考えれば決して楽な買い物ではなかったはずだ。もちろん、就職したら毎月母に返済していくつもりだったのだが、こうして我が家に本当にピアノが来た。

母の仏壇と、そしてピアノが家族に加わった。

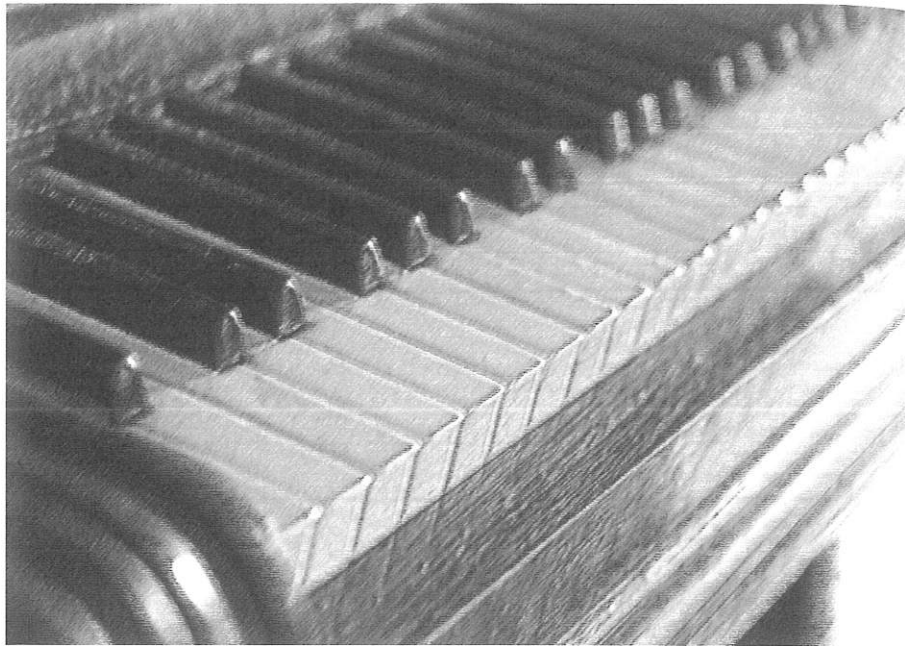
この頃、昭和も六十年代に入ると日本はバブル景気に沸き、家庭の教育熱とりわけ音楽教育が盛んになった。子どもにピアノやヴァイオリンを習わせるといのが、当時の若い親世代のある種のステータスだったような気がする。

我が家でも、やんちゃで何にでも興味津々の次男には音楽が向いているのではという過大な親の期待から、「三歳児音楽教室」なるものに通わせることにした。その教室は親子で一緒にレッスンを受けるものだったが、ちょうど三男の育児休業中でもあり、何とか時間のやり繰りがつくと思っただけだ。これが息子たちとピアノとの出会いである。

初レッスンの日はあいにくの雨だった。小さな黄色の傘をくるくる回し、やはり黄色の長靴をぶかぶかと踏み鳴らして、にこにこ嬉しそうな次男の姿が今でも目に浮かぶ。

弟が生まれ母親に甘えられない小さなお兄ちゃん、ピアノが好きというよりは、その時間だけは母親を独り占めできることが嬉しくて音楽教室に通っていたのだと後で思った。

弟が習い始めると、面白そうと思ったのか対抗心を燃やしたのか、長男もピアノを習いたいと言いつつ出た。結局育児休業も終わるので音楽教室の先生に出張レッスンをお願いすることにした。普段は弾かないのに、レッスンの日が近づくと兄弟でピアノを取り合つて俄か練習をした。自分



私の人生の大半を見ていたあのピアノは、きつと今頃どこかで新しい出会いに恵まれ、素敵な音を響かせているにちがいない。そして今、我が家には小さなキーボードが置かれ、十分にその用をなしている。

あの日の雨は何だったのか。はじめ私は、不思議だけれど長年共に過ごしてきたピアノからのお別れの挨拶に違いないと思っていた。

「今まで大事にしてくれてありがとう。お別れしても、私はこれからも現役で頑張るから、あなた達も元気でね」と。けれど、ある日ふと父との別れの雨を思い出した時、急に心がざわめいた。あれはピアノからではなく母だったの

から習いたいと言いつ出した兄の方が、年も上でいくらか熱心に練習していたので上達も速かったが、弟の方は全く龜の歩みのようであった。それでも二年ほど経つと兄は学年の行事で、弟も生活発表会で鍵盤楽器の担当となり、また、ピアノ教室の発表会もあつてふたりは必要に迫られてピアノの前に座るようになった。家の中にピアノの音が響くのは心地よいもので、ささやかな幸福感を醸しだしてくれた。もし今、母が生きていたらどんなに喜んだらうと、短すぎた母の人生を思った。やがて末の三男も習い始め、その頃の数年間、ピアノはかなりの争奪戦となり、忙しく働いてくれた。

私が子どもの頃、記憶の中の父は、怒ると怖いけれど日頃は優しく口数も少なく、いつも植木の世話をしていた。珍しい花を咲かせては娘と一緒に写真に納めるのだが、母親、妻、娘四人という女ばかりの家で一人働きたった父のささやかな楽しみだったのだろう。同居してからも父は穏やかで孫たちを可愛がり、好きな庭いじりに精を出した。元氣盛りの男児三人の賑やかな遊び声、騒々しい兄弟喧嘩とそれを叱る娘の大声、少しづつ上手くなっていくピアノの音……それらを聴きながら父は何を思っていたのだろうか。拭うことのできない寂しさひとりで老いて行く不安を抱えながら、植木を相手に孤独と向き合っていたのかもしれない。今、自分が当時の父の歳に近くなって、そんなことを

しみじみと思う。

後年、その父が亡くなって葬儀の日、私たち家族は実に不思議な雨に出会ったのだった。お骨を拾い火葬場を出たその時、雲一つない真つ青な八月の空を、ほんのひとときサーと雨が通り過ぎていった。キラキラと太陽の光を反射しながら、それは如雨露で水を撒いたように細くて優しい静かな雨だった。

「おじいちゃんがみんなにさよならを言って逝つたんだね」

息子の言葉に涙が溢れた。

学年が上がるにつれて部活や受験で忙しくなった息子たちは、ピアノ練習は後回しとなりレッスンも辞めてしまった。この頃、私も教材を家で練習することはなく、やがて息子も一人ずつ家を離れ独立していき、以来ピアノの出席はほとんどなくなった。だが、私はいつの日か孫たちがこのピアノを弾く姿を密かに思い描いて大切にしてきた。ピアノが親子三代いや四代に受け継がれるなんて何と素敵な事かしらと思つて。けれど、幼い頃はピアノを叩いて喜んで遊んでいた孫たちは、いつしかスポーツに夢中になり、その気はないようである。何とか孫の気を引こうとする私。

「ピアノ、持つて行っていいわよ」

「狭いマンションには置けないし、来た時に弾かせてもらいますから……」

やんわりと嫁に断られた。

私たち夫婦は共に退職し、六十の手習いでコーラスを始めた。すると今度は、正しい音程を取るために一本指で夫がピアノを弾くようになった。そこで、久々に調律をお願いし、思いがけず褒められたという訳である。

別れの前日、私はまるで娘を嫁に出すかのように、隅々まで念入りにピアノを磨いた。どっしりと黒光りしたその姿がもう居なくなるのかと思うと、何とも言えない寂しさと愛おしさが込み上げてきた。

「きれいよ。今までありがとう」

私はピアノの鍵に小さな鈴をつけた。

私の人生の大半を見ていたあのピアノは、きつと今頃どこかで新しい出会いに恵まれ、素敵な音を響かせているにちがいない。そして今、我が家には小さなキーボードが置かれ、十分にその用をなしている。

あの日の雨は何だったのか。はじめ私は、不思議だけれど長年共に過ごしてきたピアノからのお別れの挨拶に違いないと思っていた。

「今まで大事にしてくれてありがとう。お別れしても、私はこれからも現役で頑張るから、あなた達も元気でね」と。けれど、ある日ふと父との別れの雨を思い出した時、急に心がざわめいた。あれはピアノからではなく母だったの

作家集団「塊」プロ作家による 作品 添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします
懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ!
八覚正大(新潮新人賞)・大高雅博(群像新人長編小説賞)・都築隆広(文学界新人賞)・五十嵐勉(群像新人長編小説賞/インターネット文芸新人賞)
「文芸思潮」の読者には特別料金で指導いたします。

あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい!!

詩		小説	
1篇 A4用紙2枚以内	3000円	1篇 20枚まで	7000円
エッセイ		50枚まで	10000円
1篇 5枚以内	4000円	100枚まで	15000円
10枚以内	5000円	200枚まで	20000円

- ご希望の作家と面談指導も可能です。
- ご希望の方には案内所を送付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。

作家集団「塊」事務局

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13
TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848
asiawave@qk9.so-net.ne.jp



「万人の恋人」の
謎の魅力に迫る
樋口一葉の24年の生涯と、
評述流谷三郎の謎の魅力を、
独自の視点で探る。



武中 彩
たけなか あや
1952 福岡県生まれ
福岡教育大学を卒業後、北九州市
内の公立小学校で35年間教職に
就く
退職後は、これまで出来なかった
新しい活動を始めて趣味の幅を広
げ楽しんでいる
また、ボランティアで役所の相談
員の活動なども行なっている

ではないか。
「もう形見のピアノだとか思わなくていいのよ。教職もや
り遂げたのだから、これからはもっと自由に、思ったよう
に生きなさい」
遠いあの日、「行つてらっしゃい」と見送つたままの私に、
ようやく届いた母からの返事だったのだろうか。
いつの日か父と母に会つたら、私の家族のこと、天職だつ
たと思う教師生活のこと、そして沢山の後悔と感謝……数
えきれない程の思い出を私は一気に話すだろう。そう、滝
のように豪雨のように。そして今度こそ、母にピアノを教
えてあげよう。でも、その楽しみはもう暫く取っておきた
いと願ひながら、これからの日々を前向きに生きていこう
と思う。

受賞の言葉

武中 彩

子どもの頃から、私は四人姉妹の中でも母との縁が特に
強いと感じてきました。歳を重ねるに連れ、その想いを何
か形に表したいと思うようになり、このエッセイ賞に応募
しました。
青春時代を戦争に奪われ、結婚してからは家族のために
生き、ようやくこれからという時に突然、母はその生涯を
閉じました。父の人生もまた波乱に富んだものでした。今
の私があるのは父母のお陰なのに、私は感謝の思いも別れ
の言葉も伝えていないのです。
身に余る賞を頂き、やっと一つ親孝行ができたかなと
思っています。



NTTプリンテック・読売新聞社/主催
第1回「インターネット文芸新人賞」最優秀賞
日本の平和のなかに発狂していくカンボジア難民ホ・シ
ディ。彼が病院から出し続ける緑の手紙が、戦後日本の
繁栄と平和の意味を根底から問いかける!!
インターネット新メディアで登場した、新手法の力作長編!

1700円(税別/送料共)
御注文は折込葉書でアジア文化社まで

暗闇を走る足音

飛塚 優

私の父は子供の頃、教頭先生に柔道の払い腰で床に叩き付けられて気絶した。これは祖母に聞いた実話である。父は大正三年の生まれだから尋常高等小学校の時代の話だ。祖母は学校に呼びつけられ、平身低頭して父を引き取ったのだとか。繰り返し聞かされた割に詳細を覚えていないのだが、概略はこうである。朝礼の時に教育勅語が語られ、「天皇さまの赤子である私も臣民は、お国のために命をささげ……云々」

訓示が終わった後で父は手を挙げた。発言を促されて彼は教頭に質問した。

「天皇陛下が馬鹿でもですか」

その父も成長し、徴兵されて中国大陸に出征した。しかも晩年の父の自慢は「村で甲種合格になったのは俺だけだぞ」というものであった。父は衛生兵であった。父が古希を迎えた年に自費出版した短歌集「冬の雑草」がある。その前書きにはこうある。

が続出した。よろめきながら歩くその姿はまるで幽霊が行進しているようだったという。集団のまわりには中国人が送り狼の群れのようについてきた。そして粗末な食料と交換した貴金属や衣類を持ち去ったという。ある母親は赤ん坊を隣を歩く人に預けて、目の前に差し出された饅頭に思わずむしゃぶりついた。食べ終わりに返って赤ん坊を探すがどこにもいない。半狂乱で泣き叫ぶ彼女に「あなたさっき饅頭と交換したじゃない」という声が……。

こんなことは日常茶飯事であったという。父は私によく言った。

「覚えておけよ。人間は衣食が足りていてこそ、はじめて人間なんだ」

父は帰国後の歌集にこう詠んだ。

「大陸に売られ攫われ捨てられし児らを眼で見しなす術なくに」

「断髪に頬煤のこる乙女らの胸のふくらみ哀しかりけり」

「断髪の人妻かたくもの言わぬその胸内が吾を突き刺す」

自国民を守るべき日本軍は我先に撤退していた。置き去りにされた「開拓団引き揚げ者」が、侵攻してきた兵隊や暴漢から女性たちを護る手段の「男装」にも限界があった……。

もう一つの話は、「引き揚げ」に至る直前の悲惨な生活状態である。日本軍の威光を傘に着て現地に暴力をふる

「昭和八年、満州独立守備隊に入隊し一日の終わりに時々趣味の短歌を記した。昭和十一年、通化省で県公署に就職したが、当時は治安の維持が急務で、軍隊同様に地方警察署に派遣され、反満抗日集団と戦った。その後、阿片麻薬断禁政策を担当、昭和十五年、白頭山山麓の撫松県に転じ、秘作罂子の取締りに樹海を潜行した。昭和二十二年六月、八路军と中央軍との攻防戦のさなか通化を脱出、奉天収容所を経て引き揚港の葫蘆島に至り……」

私は昭和十九年に満州の奉天で生まれた。中国残留孤児が新聞やテレビで報道されるたびに母は言ったものだ。

「何度お前を大陸に置いてこようと考えたことか」と。

両親に聞いた数多くの戦時中の逸話で、子供心にも強く印象に残った話が二つある。

その一つは、父たちが満蒙開拓団引揚げ者の集団を葫蘆島に導くときの話である。着の身着のまま脱出を図った老若男女には、連日の強行軍と寒さと飢えで衰弱死する者が

「日一度粟雑炊のその血さえたかる虱に吸われ近くひと」と

「病み飢えて昼も祖国の夢見ると言ひしその人夕べに逝けり」

「市街戦のさなか破水をみとりやりし中国人の盟友如何にありなむ」

歌の中で父は中国人を盟友と呼んでいる。「阿片麻薬断禁政策」を担当していた父には中国人や朝鮮人の現地協力者がいた。当時の我が家には、その他にも大勢の中国人や朝鮮人が自由に入入りして、幼児の私は彼らの手から手へと渡り歩き、可愛がられていたという。しかし、彼らと家族同様の付き合いをする私の両親は、現地の日本人の間ではすこぶる評判が悪かったらしい。

敗戦とともに状況は一変して、日本人を「公然と擁護する」ことは、中国人にとって許しがたい裏切り行為となった。だが、私たち家族は食べ物に困ることはなかったという。なぜなら毎日深夜になると、遠方から暗闇の中を走ってくる人がいる。その足音がだんだん大きくなり近づいて来て、我が家の玄関先を通り過ぎる時に「どさっ」と物が

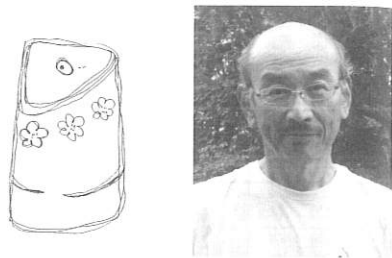
投げ込まれ足音は次第に遠ざかる。しばらくすると、今度は別な方角から違う足音が近づいてきて同じことが行われる。足音は時には子供や老人とも推察され多様であったが、玄関を開けると、そこにはいつも紙に包まれた野菜や肉や魚が転がっていた。

父は八十歳で他界するまで、
「俺はあの足音は絶対に忘れない。国を恨んでも人を憎むな、差別はするなよ」と言い続けていた。

時は流れて世界の情勢は大きく変化した。日本も元号の変遷を重ねて更なる平和国家を目指している。しかし、国家や宗教や民族の争いにより、地球上には数多くの避難民が流浪している現実はまだ定できない。「満蒙開拓団引揚げ者」が受けたような迫害と苦難は時を変え場所を変えて現在も継続しているのだ。避難を受け入れる側も排斥する側も、それぞれが相譲れない理由を主張して対立している。多すぎる難民の救済に対する「理想と現実の狭間」で、今、世界中の国々のリーダーや民衆の心が揺れ動いている。困窮する人々に迷わず手を差し伸べることができる国は、同じく困難を経験しその苦しみを共有している国に多い。日本は難民条約を批准しているが、一昨年の難民認定

申請者処理数一万一千三百六十一人に對し、認定者数はたったの二十人で約0・02%である。その一方で「安い労働力」を目当ての「外国人技能実習生」は約二十七万四千人で、低賃金と劣悪な境遇や暴力などから逃れ、失踪せざるを得なかった実習生が約七千人もいる。このような現実をどの様に解釈するかは、その人の持つ背景によって異なりそれは各人の自由である。現実をどのように受け容れ、どう対処するかは他ならぬ自分自身の問題なのだ。歴史問題の裏にある実態を知らず、「戦闘ゲーム」に熱中する若者たちを非難することはできない。その現状を産み出し放置してきたのは他ならぬ我々大人の世代なのだから。

私は既に古希を過ぎたが、目の前の現実から逃避して無関心を装った結果、自らの「エゴと自己欺瞞」に苦しめられることがある。そんな時、自分を励まし前向きに活動するためにしていることがある。それは幼児期に大陸で聞いていたはずの、あの「暗闇をひた走り我が家に近づいてくる足音」に思いを馳せることである。そして家の中で手を合わせていた両親の感謝の声や、玄関先に食料が投げ込まれる「どさっ」という残響音に、私は今も尚、心を傾け必死に耳を澄まし続けている。



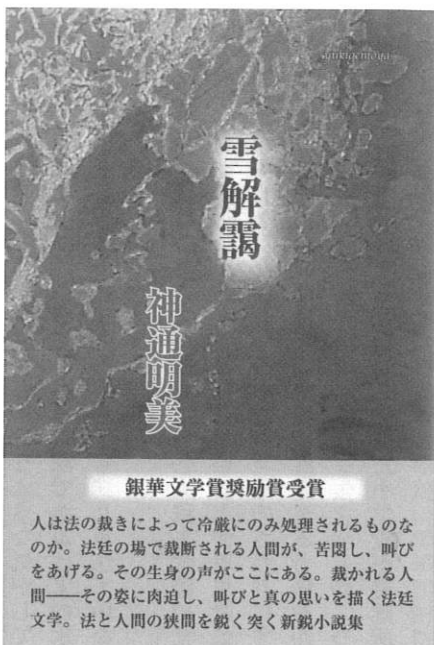
飛塚 優 とびつか まさる

1944 満州奉天生まれ
「ヒロシマ反核ダイイン」の創始者
<https://storys.jp/story/33318>
差別や障害者関連で市民活動
訪問介護NPO副理事長、介護ヘルパー、日本赤十字救急法救急員、北海道知事認可の「アウトドア乗馬ガイド」、テレマーク・スキーヤー、スポーツ流鏑馬技術指導員、「災害救助騎馬隊」事務局長

受賞の言葉

飛塚 優

幼児だった私は「暗闇を走る足音」の記憶がありません。何度も話を聞いていたうちに、ラジオドラマの音響のように、子供心に沁みたままで現在に至ります。
「わが子を戦場に送りたい親はいない」はずなのに、いつも民衆の側は被害者となり加害者にされてしまう。
「国を恨んでも人を憎むな、差別はするなよ」と言っていた仏壇の父に、受賞の報告をして喜びを分かち合いたいと思います。ありがとうございます！



裁判の前の現実を素材にした珠玉の短編集
御注文はアジア文化社まで
送料とも1600円

☆「文芸思潮」は下記の書店で店頭販売されております。

- 〔東京〕
ジュンク堂池袋本店
紀伊國屋書店新宿本店
- 〔大阪〕
MARUZEN&ジュンク堂梅田店
〔インターネット〕
アマゾン

てんけいかいきょう
天恵戒驕

この国の美しさは水にあるとずうっと思ってた生きてきた。寒さ乗り越えて咲き誇る花、萌えあがるみどり、黄金色の実り、海に頼む恵みのすべての源も水にあると一片の疑いも挟まずに信じてきた。

ところが、震災以降その思いが揺らぎはじめている。目の前にある海が、得体の知れない化け物に変わり突然牙をむいた。そんな光景に触れ、思い浮かべたこと、それは人間が重ね続けた愚かとしか言いようのない悪業の数々だ。

映像を見て、押し寄せる海水がその報いなのかも知れないと思うようになったのはそのためだ。

真つ黒な波の正体は、重金属やプラスチックを含んだヘドロだった。魚介類や動物など自然界の営みとはまったく縁のない、人間社会の悪業の産物だった。

堤防を乗り越えるヘドロの正体を目の当たりにした人々はやっぱりと思ったに違いなかった。次第に明らかになるを求めるようになった。自分の住んでいた町の様子がどうなっているのか、さらには原発事故の情報も欲しがった。青く澄んだ波がTV画面に映し出されたのはそれから暫く後の朝のことだった。「ここはどこだ」と、驚きの声があがった。それは衝撃的なことで今でも忘れられない。

誰もが透き通った波を見て驚いていた。津波が青い海水そのままに押し寄せる光景が不思議に見えたのだ。あの真つ黒なヘドロへの慣れが青い波を忘れさせていた。

そこが重茂半島であって欲しいと願う自分がいて、複雑な思いが胸の内を駆け巡った。なぜならば、そこには友人や知人がおり、かつて事務職員として勤務していた学校があるからだ。

誰かが呟いた。
「重茂だ……」

その一言で涙が溢れ、頬を濡らした。気がつけばその青く澄んだ波もまた水門を突破し、堤防を押し倒し、さらには人々の命と財産を奪ったことに変わりはなかったが、まっとうな生き方をしている人間の存在が確かめられた気がして涙が止まらなかつた。不謹慎なことかも知れないが、身も心も清められた思いで、久しくなかつた感情が蘇った。

本州最東端の重茂半島は、陸中海岸の景勝地、浄土ヶ浜で知られる岩手県宮古市の市街地から対岸にまるで島のよ



荒田正信

科学的な証明を待たずに、これは人災だったのではないかとと思うようになり、ある時期からそれが確信に至ったのではなかつたか、そんな気がする。

国を挙げての復旧、復興の工事が急だ。津波が街に流れ込まないようにと、どこまでも続く堤防を築き、一滴の海水も入れないという構えだが、どこか違うような気がしてならない。なぜならば、すべての生命の源であるはずの水の問題がないがしろにされ、何の手立ても講じられていないからだ。

あの海から運ばれたヘドロと海水には一人残らず驚いたはずなのに、その対策を誰一人口にしないことが不思議でならない。具体的なこととはもちろんだが、そのさわりには思いが届いていないのではないか。そう考えると穏やかではおられない。

東日本大震災が発災すると勤務していた小学校が避難所となった。電源が復旧すると、被災者は学校のTVで情報うに見えるところで、この地区にある小学校に四年間勤務したことがある。

宮古湾を左に見て日の出に向かって車を走らせる朝、仕事を終え夕日に向かってハンドルを握る通勤は、快適というよりも贅沢なものだった。

重茂半島は南北に長い。半島を横断する九十九折りの峠を登るとそこから重茂で、その峠にはこんな看板が立てられている。

お願い

ここでは、合成洗剤を絶対に使わないことを、
申し合わせた地域です。御協力をお願いします。

五十五年五月

重茂漁協常総会
重茂漁協婦人部総会

「合成洗剤を絶対に使わないこと」の文字だけが朱書きされていて、この半島各所に設置されていた。

漁協が、店頭に並ぶすべての合成洗剤を買い取り、さらには各家庭を訪問、台所に合成洗剤がないかの確認作業を徹底する。そのうえで石鹸を漁協職員が訪問販売する。合成洗剤追放の徹底ぶりは他に例がなく、地域住民の生活を守るため、あるいは住民の生活を豊かにするための決意を

明確にするものだったといわれる。四十年前も前のことだと聞けば大概が驚く。なぜならば、理屈ではわかっていても、実行するのはそう簡単なことではないことぐらい誰でも知っているからだ。

こんな集落があるのかと着任前にして胸が高鳴った。早くその輪に加わりたいたいと思った。

四月、異動して間もなくPTAの役員会が開かれてまず驚いた。遅刻する役員が一人もいなかった。それまでに七校の小中学校勤務を経験していたが、そんな学校に勤務したことなど一度もなかったからだ。かつて勤務した学校なら「〇〇時間で……」と、決まっていれば準備は済んだ。ところが、重茂にはそういう保護者は一人もいなかった。

重茂のこともたちはよく働く。掃除も給食当番も、浜の仕事も。「働ぐ」と書いて「かせぐ」と読むのだと教えられた。

漁協ビル駐車場に、重茂漁協初代組合長、西館善平翁の胸像がある。善平翁は、戦前は文部省の視学官として朝鮮半島にあったといい、その後、帰郷、漁協結成に汗を流し組合長に就任したという。

かつて、重茂は陸の孤島と呼ばれていて、高校に進学する生徒の通学は困難だった。そこで漁協が市内に寄宿舎を建設、月山寮と名付け、漁協組合員のこともたちの進学を可能とした。組合長を退任すると、私財を投じ、こどもた

ちのためにと重茂教育振興会を設立。奨学金制度を確立。善平翁は「奨学金の返済が滞っても督促してはならない」と語ったという。

組合長在任中、根滝漁場（定置網）の祝賀行事で記念品にこう書いた。

「天恵戒驕」

「天の恵みに感謝し、驕ることを戒め、不慮に備えよ」これは善平翁の造語だという。

「私たちのふるさと重茂は、天然資源からの恵みが豊富であり、今は何の不自由もないが、天然資源は有限であり、無計画な採取をしていると近い将来枯渇すること間違いなし」

さらに加えた。

「天然資源の採取を控えめに、不足するところは自らの研鑽により、新たな資源を産み補う。これが自然との共存共栄を可能とする最良の道である」

この教えこそが合成洗剤の追放、後進の育成に結びついた。このあたりでは生業を海に求める人たちを浜守人と呼ぶ。その浜守人の誓いこそが天恵戒驕なのである。

西館善平氏の書簡に触れる幸運を得て読ませていただいたことがあった。丁寧な文字、柔らかで優しい文章がその人となりを見せてくれた。

天恵戒驕の精神を引き継ぐ人たちがいて、震災復興に大

きな力を発揮した。五十施設が被災、被害額四十二億円、八百隻の漁船を失い、養殖漁場も壊滅的な被害を受けたが、重茂漁協は国の支援を待たずに独自に中古船の発注、雇用の確保を進め、全国から注目を集めた。

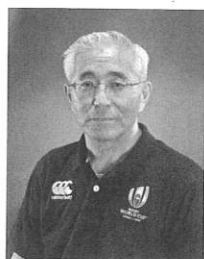
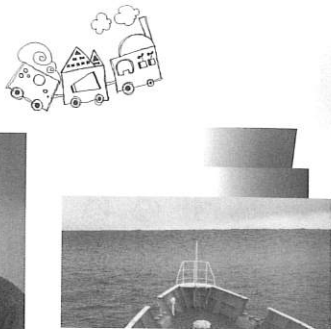
漁獲高はほぼ元の状態にまで戻ったと聞くが、重茂の人たちの歩みはまだまだ止まらない。

山の木々が豊かでなければ養殖漁業は停滞する。伐採されると海に悪影響を及ぼすという観点から、漁協が山を丸ごと買い取るという決断をさせた。もちろん保安、育成も怠ることがない。

青い津波の来襲は、海の底まで守られている重茂集落の努力を証明し、重茂ブランドをさらに高めることにつながった。海が汚れる前に対策を講じ、重茂ブランドの確立を成し遂げた。小さなことの積み上げと、謙虚にして誠実、素早い行動が海を守り、住民を守ったといえよう。

海底に堆積するヘドロを浄化することは至難の業だと思われるが、天恵戒驕の精神に学び三陸の海を守れないものだろうか。宮古で、釜石で、大船渡で、そして気仙沼で、そんなことを考える。

汚れを海に流すのではなく、透き通った水を海に流す努力をしなければと思う。そうすることによって海に頼む恵みがさらに豊かなものになるのではないか、そんな気がする。



荒田正信

あたらまさのぶ
2012年 エッセイを中心
に投稿をはじめ、命、こども、一揆などを題材にする
市井の物書き、を自認
以後、全国公募で15作以上
が入選

受賞の言葉

荒田正信

あたり前を蔑ろにすることさえあるのが人の業。そんな人の業が震災で露見した。だが、誰も気付かないのか、それとも知らん振りを決め込んでいるのか推し量ることはできないが、人々は解決をコンクリート壁や自動車道に求めている。実に悲しいことだ。ならば気づきのお手伝いができないかこの作品を書いた。この作品がさらに多くの方の目に留まるチャンスをお願いしたい。